

令和6・7年度 研究報告書

# 子どもの声から不登校を考える Ⅱ

## ～子どもの多様な学びに寄り添う支援のあり方～



認定特定非営利活動法人

教育活動総合サポートセンター

この報告書に記載されているアンケート調査やエピソード等につきましては、個人が特定されやすいという面があります。他の出版物等への転載を控えていただくようお願い申し上げます。

## はじめに

この10年の間に、不登校の子どもたちを取り巻く状況は大きく変化しました。2016年の「教育機会確保法」及び、2017年改訂の「学習指導要領」では、不登校の子どもたちに「学校復帰」のみをめざすのではなく、「社会的自立をめざす」ために教育をうける機会を確保するという趣旨が明言されました。一方では、それらが本格実施を迎えた2020年にはコロナによる全国完全休校が行われ、それまで年間約1万人の増加となっていた不登校児童生徒数が、5万人単位での増加となりました。原因は様々に論じられていますが、不登校に対する考え方が大きく変わるきっかけになりました。その後も、これまでに出版された様々な施策に加えて、「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策（COCOLOプラン）」等により「不登校児童生徒に対する支援の在り方」に大きな変化がみられ、「教育課程の柔軟化」等が今日までに提言されています。

川崎市教育委員会においても、一昨年7月に公表した「不登校対策の充実に向けた指針」の中の3本柱である「『チーム学校』による校内支援体制の充実」「多様な教育機会の確保」「関係機関との連携強化」に基づき、校内での別室登校に対する整備や「学びの多様化学校」を念頭に置いた様々な場での試行が始まりました。その考え方に基づき、「みんなが楽しく学べる学校」「魅力ある学校づくり」といった学校改革も求められています。

そのような状況の中、2024年度に30日以上登校せず「不登校」とされた小中学生は、増加率こそ大きく低下したものの、過去最多となった前年度を超え35万人に達したことが文科省から発表されました。その一因には、「学校にこだわらない」という考え方が保護者にも理解されたことなどがあると思われます。学校にこだわらない不登校対策としては、受け皿となるべき、子どもが安心して学べる多様な場の整備が重要ですが、まだまだ十分とは言えない状況です。

これらの状況や、昨年度までの研究の経過を踏まえ、さらに子どもの声を支援に生かす必要があると考え、研究テーマを「子どもの声から不登校を考えるⅡ～子どもの多様な学びに寄り添う支援のあり方～」として継続して取り組むこととしました。研究2年目となる本年度は、昨年度のアンケート内容を見直し、子ども・保護者アンケートを再度実施しました。アンケートでは集計した数値の分析から、子どもや保護者の思いや求めていることを把握するとともに、子ども・保護者が求める学校について自由記述で書いてもらいました。また、宮ノ下・南野川・旭町の3か所の「こどもサポート」で、複数のスタッフが子どもの声を聞き、一人ひとりに合った支援に取り組んだ実践をまとめました。更にスタッフアンケートでは、日常的に取り組んでいるミニ事例をまとめました。

サポートセンターの研究は、様々な面から不登校の現実を理解し、目の前の子どもたちにより適切な支援をすることを第一の目標に取り組んで参りました。今後もこの方向は変わりなく続けていく方針です。一方では、学校に通っている子どもの中にも、不登校の数に入らない別室登校の子や学校に居づらさや苦痛を感じている子どもも多く存在します。その子たちも含め、すべての子どもに必要な「学びの多様化」や「学校で学ぶことの意義」を大切にしていかなければなりません。

サポートセンターでは、子どもたちが「安心して、安全に、楽しく」学び、自立に向かって育っていけるような環境づくりに、学校・教育委員会や様々な子どもたちを支えている皆さんと連携・協力しながら取り組んでいかなければならないと考えています。

最後になりますが、横浜国立大学名誉教授岡田守弘様には、私たちの研究を平成21年度から17年間の永きにわたりご助言をいただきました。先生の温かいご助言と経験に基づいた深くて確なご指導を賜り、今日まで研究を継続することができました。改めて、心より御礼申し上げます。また、貴重な資料を提供してくださった川崎市教育委員会等関係機関の皆様にも心から感謝申し上げます。

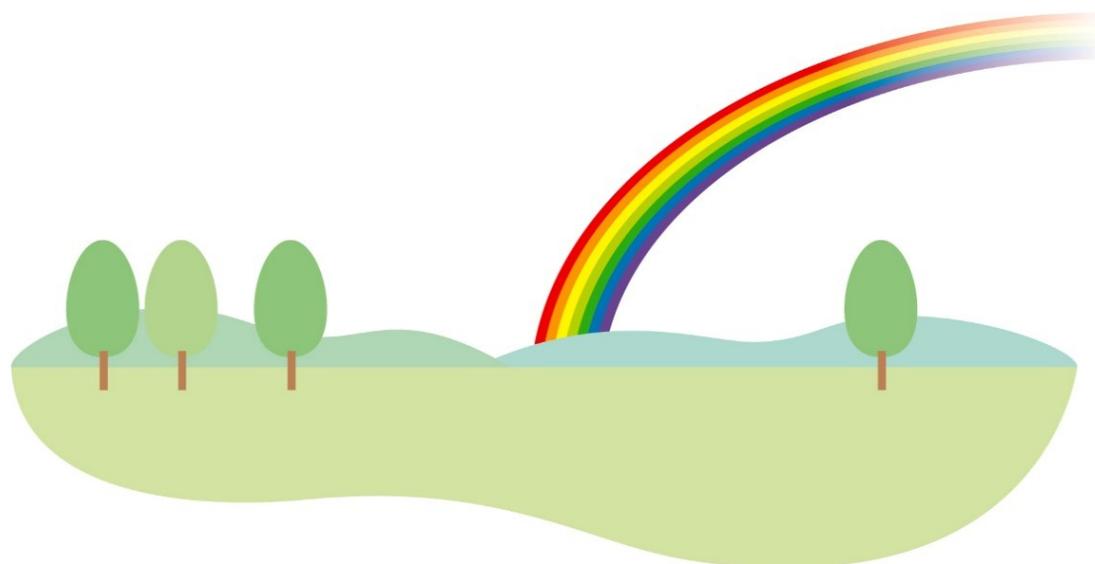
認定特定非営利活動法人 教育活動総合サポートセンター  
理事長 田中真喜男

# 令和6・7年度研究報告書 目次

|                              |    |
|------------------------------|----|
| * はじめに                       | 1  |
| I 研究の概要                      | 4  |
| 1 「不登校」にかかわるこれまでの動向          |    |
| 2 研究テーマについて                  |    |
| 3 令和7年度の取り組み                 |    |
| II 子どもの声と保護者の思い～アンケート調査結果から～ | 7  |
| 1 アンケートについて                  |    |
| 2 アンケート結果                    |    |
| （1）学びの場について                  |    |
| （2）友だちについて                   |    |
| （3）家族について                    |    |
| （4）あなた自身について                 |    |
| （5）あなたの生活について                |    |
| （6）子ども・保護者が求める学校とは           |    |
| III 3つのこどもサポートでつくる多様な学びの実践事例 | 19 |
| 1 一人ひとりの学びに寄り添う「こどもサポート宮ノ下」  |    |
| 事例1 好きな「ものづくり」から学びを広げるAさん    |    |
| 事例2 「これ、どういういみ？」と聞いたBさん      |    |
| 事例3 中学時代をふりかえるCさん            |    |
| ■ 「こどもサポート宮ノ下」の多様な学びと支援      |    |
| 2 様々な体験のできる「こどもサポート南野川」      | 26 |
| 事例1 卓球をした後でたくさん話をするようになったDさん |    |
| 事例2 畑の作業に積極的に取り組むEさん         |    |
| 事例3 料理が趣味になったFさん             |    |
| ■ 「こどもサポート南野川」の多様な学びと支援      |    |
| 3 安心して過ごせる場所「こどもサポート旭町」      | 32 |
| 事例1 小・中・高と納得しながら成長していくGさん    |    |
| 事例2 心を休め、元気をとりもどすHさん         |    |
| 事例3 悩みを複数のスタッフに相談しようとするIさん   |    |
| ■ 「こどもサポート旭町」の多様な学びと支援       |    |
| 4 多様な学びをつくるスタッフの取り組み         | 38 |
| （1）スタッフが日常取り組んでいるミニ事例        |    |
| （2）継続して子どもの声を聞く              |    |
| ①卒業生の言葉                      |    |
| ②「あなたの声を聞かせてね」ポストの設置         |    |
| IV 令和6・7年度の研究を振り返って          | 43 |
| 1 研究の成果と今後の課題                |    |
| 2 研究の経過・研究協議会の委員等            |    |
| （1）令和7年度 研究の経過               |    |
| （2）研究協議会の委員                  |    |

## ＜令和 7 年度のサポートセンターの活動紹介＞

|   |   |    |
|---|---|----|
| 1 | サポートセンターの研究のあゆみ   | 47 |
| 2 | 子どもへの学習支援・居場所づくりの活動   | 50 |
|   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・こどもサポート宮ノ下                      ・こどもサポート南野川                      ・こどもサポート旭町</li> <li>・のびのびファーム                              ・ふれあい体験活動</li> <li>・生活に困っている家庭等の子どもへの学習支援                      ・地域の寺子屋事業</li> <li>・外国につながる子ども向け寺子屋事業                      ・たのしいキッズセミナー</li> <li>・サイエンスキッズ                              ・出前科学教室</li> </ul> |    |
| 3 | 保護者を支援し、連携する活動  | 66 |
|   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校等に悩む保護者と子どもへの教育相談                      ・中原区保護者ミーティング</li> <li>・サポートセンター保護者の会                      ・不登校相談会・進路情報説明会など</li> </ul>   |    |
| 4 | 教職員・市民等を対象にした活動   | 70 |
|   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・文化講演会                      ・子どもの権利学習推進事業</li> <li>・臨時的任用教員等研修事業へのサポーター配置</li> <li>・学校への教育サポーター配置事業                      ・大山街道ふるさと館の管理運営</li> <li>・「友だちに薦めたいこの1冊の本コンクール」事業                      ・こども文化センターの環境整備</li> </ul>   |    |
| * | サポートセンターを支えていただいている方々／サポートセンター会員  | 80 |
| * | おわりに  | 82 |



# 研究テーマ 子どもの声から不登校を考える II

～子どもの多様な学びに寄り添う支援のあり方～

## I 研究の概要

### 1 「不登校」にかかわるこれまでの動向

最初に、教育活動総合サポートセンターでまとめた「不登校にかかわる国や川崎市の動向」の一覧表（p48参照）を見てみましょう。

不登校児童生徒の呼称は、昭和30年代に、「学校恐怖症」と呼ばれた時代があります。それが、昭和50年代には「登校拒否」と呼ばれました。この辺りまでは「学校に行かないことは、個人の問題行動」ととらえる傾向が強かったのです。平成の時代にはいると、「不登校」という呼称が使われます。これは、文部科学省が「不登校はどの子にも起こりうる問題であり、やみくもに登校刺激を与えるのではなく、待つことも大切である」という見解を出したのも一因です。「不登校」についての一番大きな転機は、平成28年に「義務教育段階における普通教育に相当する教育の機会確保等に関する法律」が制定されたことにあります。ここで、「不登校の要因や背景は、本人・家庭・学校にかかわる様々な要因が複雑に絡み合っている。その結果として不登校状態にあるということであり、その行為を『問題行動』と判断してはならない」としました。その後、コロナ禍で学校に行けない状況が続いたことも大きな影響がありましたが、令和4年6月に「不登校に関する調査研究協力者会議報告書」が文部科学省から各教育委員会や学校に通知されました。そこには「登校のみを目標とするのではなく、社会的自立を目指す必要がある」とことや「個々の児童生徒の状況に応じた多様な支援を行うこと」などが明記されています。また、文部科学省では、増加する不登校児童生徒に鑑み、平成17年7月より、不登校特例校（後に「学びの多様化学校」に改称）の設置を推進しています。令和7年の11月現在、この「学びの多様化学校」は、小・中・高合わせて全国に59校あります。

このような状況から、私たちは、子どもが学校に通っていない状態に関する「呼称」も変わっていく必要を感じています。今、「不登校児童生徒」を「(自分の意志で)学校に行かない子」と表現する流れもありますが、まだ「不登校」に代わる適当な言葉が見つかっていません。個々の子どもの状態に合わせた「学びの場」や「学び方」に柔軟に対応しなければならない時代になってきているからと思われる。

### 2 研究テーマについて

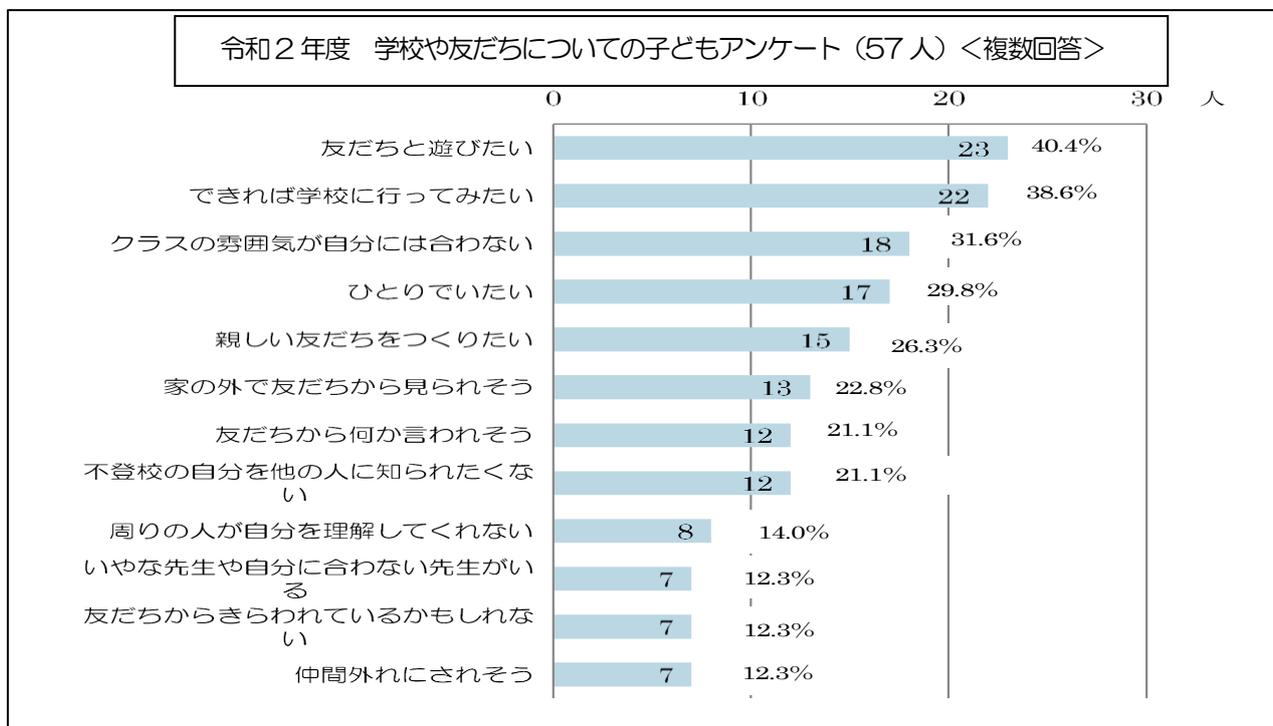
令和3年10月に文部科学省が初めて不登校児童生徒から調査を行い、「不登校児童生徒の実態把握に関する調査」（以下「実態調査」）の結果が公表されました。それまで、文部科学省では、「児童生徒の問題行動・不登校生徒指導上の諸課題に関する調査」（以下「問題行動調査」）として、学校を通じた調査しか行っていませんでした。問題行動調査では、不登校の要因を本人の「無気力・不安」や「生活の乱れ・遊び・非行」など、「本人の問題」ととらえる傾向がありました。ところが、「実態調査」では、「先生のこと」「身体の不調」「勉強がわからない」「友だちのこと（嫌がらせやいじめ）」などの学校生活を起因とする内容が多かったのです。

私たちが、令和4年度に「子どもの声から不登校を考える」というテーマで研究を始めてから4年目を迎えます。実は、「子どもの声を聞く」という営みは、令和元年度から2年間の研究で取り組んだことでもあります。

令和元年から2年度の研究では、「子どもに寄り添った多様な支援の実現に向けて」というテーマで、子どもの不安に寄り添い、安心を広げる支援について研究を進めています。文部科学省が行ってきた「問題行動調査」からでは、大人が考える問題点ばかりで、子どもの姿や気持ちが見えてこない。そこで、子どもに直接聞いてみよう、子どもを対象にアンケート調査を実施しました。令和2年度にまとめられた子どもアンケートの内容を紹介します。まず、学校や友だちについての内容を見てみると、「友だちと遊びたい」「できれば学校に行ってみた

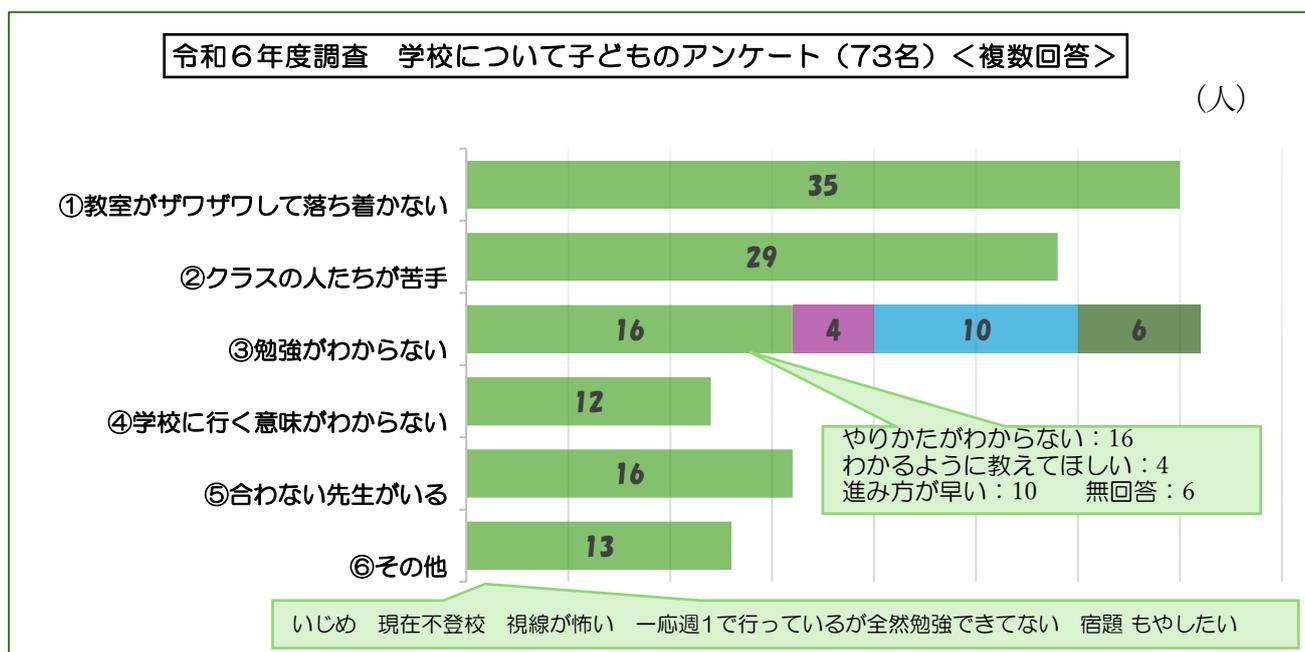
い」という気持ちを持ちながら、「クラスの雰囲気自分に合わない」「友だちから何か言われそう」「自分に合わない先生がいる」などの不安をもっていることが分かりました。

サポートセンターでは、この頃からすでに、「子どもの声を聞き」ながら、一人ひとりの子どもたちに寄り添った多様な支援のあり方を研究していたと言えます。



令和5年度の研究報告書では、学校に行かない理由を直接的に聞いていますが、「勉強がわからない」が最も多く39人、「教室がザワザワして落ち着かない」(24人)、「クラスの人たちが苦手」(25人)、「学校に行く意味がわからない」(19人)、「合わない先生がいる」(17人)等の順に回答が続いています。

このことについて、令和6年度は、さらに詳しく子どもたちの声を聞いています。学校での勉強については「やり方がわからない」「わかるように教えてほしい」「進み方が早い」など、子どもたちの切実な声が聞こえてきます。中には「宿題を燃やしたい」という声もありました。



このように、「子どもたちの声を聞く」という取り組みは、サポートセンターでは、実に7年にも及ぶ研究となっているのです。それだけ、「子どもたちの声を聞いて、その声を子どもたちの多様な支援に活かしていく」という営みは、とても難しい面をもっているということなのだと思います。「子どもの声を聞く」と言っても、どう聞けばよいのか、子どもを傷つける恐れはないのか、聞いたことをどう受け止めていけばいいのかなど悩みはつきません。また、子どもたち一人ひとりの思いは多様であり、一人ひとりの子どもの考える「最善の利益」と、おとなの考える「最善の利益」が食い違う面が常にあります。

今年度は、令和6・7年度の研究のまとめの年でもありますが、7年に及ぶ「子どもの声を聞き、サポートセンターの『子どもに寄り添う支援』のあり方を考える研究」のまとめともなります。そこで、今年度、研究のサブテーマを「**子どもの多様な学びに寄り添う支援のあり方**」として新たに設定しました。

文部科学省では、現在、連続30日以上学校に行けない状態を「不登校」と規定していますが、サポートセンターには、この文部科学省の「不登校」の定義に当てはまらない子どもたちもたくさん通ってきています。近年、子どもたちが抱える困難さが多様化・複雑化する中で、私たちは、「学び」を、学習指導要領に準拠した「学習」という狭い解釈ではなく、子どもたちが「学びたい」と声を発したことを「学び」として受け止め、子どもたちの一人ひとりの思いに寄り添う多様な支援のあり方を研究してきました。

### 3 令和7年度の取り組み

令和7年度は、令和6年度の研究に準じて、次の4つに取り組みました。

#### (1) 子どもアンケート、保護者アンケートの実施

研究テーマ「子どもの声から」とあるように、まず、子どもが、自分のこと、友だちのことなどをどのように感じているかを探ることにしました。保護者からもアンケートを取り、子どもと保護者が共通して感じている部分と、重ならない部分について考えていくようにしました。これらのアンケートの分析を通して、子どもたちにより確かが多様な支援のあり方を研究していくことができると考えました。

#### (2) 実践事例の収集と検討

サポートセンターでは、宮ノ下、南野川、旭町の3つの特徴の異なる「こどもサポート」で子どもの学びの場、居場所を提供しています。それぞれのこどもサポートで、実際にどのように子どもの声を聞き、どのように多様な支援をしているのかを探ることから、今年度の研究を深めていくことにしました。

#### (3) スタッフアンケートの実施と研修

昨年度と同様に、子どもをサポートするスタッフを対象に研修する機会を設けました。その場で、アンケートを実施し、子どもの声を聞き、その声を活かした多様な支援のあり方を探ることにより、研究テーマに迫っていくことにしました。

#### (4) 「あなたの声を聞かせてね」ポストの設置

子どもたちの声を日常的に受け止め、支援のあり方を考えるためにポストを設置しました。必要に応じて返事を書き、子どもに寄り添う支援を目指しています。

## Ⅱ 子どもの声と保護者の思い ～アンケート調査結果から～

### 1 アンケートについて

「子どもの声を聞く」というテーマで研究を始めて4年目になります。今年度は、令和6年度から続く研究のまとめの年度であることから、昨年度のアンケート結果をふまえて更に明らかにしたい点や、子どもの自立にむけて子どもや保護者がどのような思いや願いを持っているかに着目してアンケートを実施しました。子どもと保護者に同様のアンケートを行うことで、両者が感じている共通する部分と違いがみられる部分を明らかにしようと考えたのです。

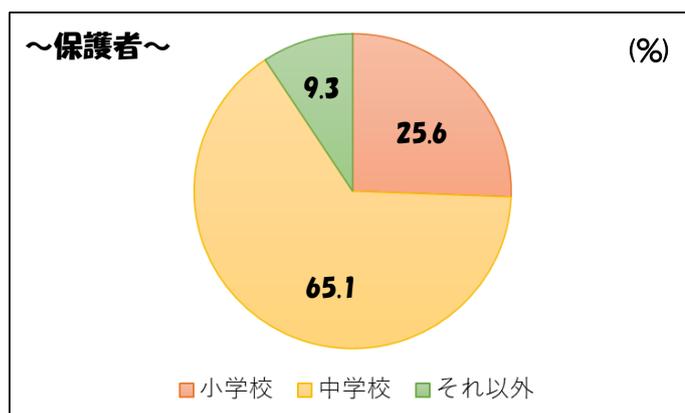
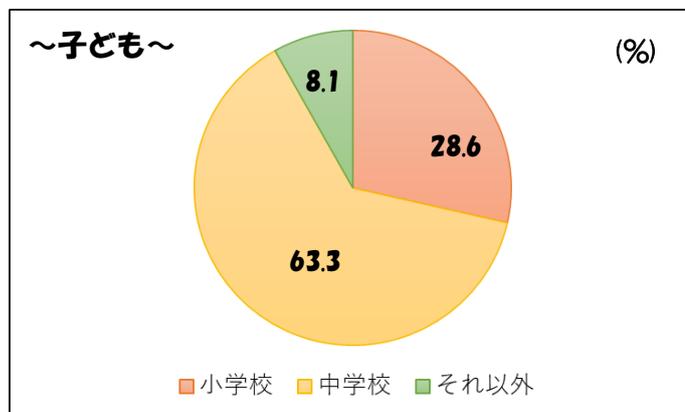
アンケートの結果から聞こえてきた子どもたちや保護者の声をしっかり受け止め、子どもの多様な学びに寄りそう支援のあり方を探り、子どもたちが安心できる環境の提供や関わりに努めたいと思います。

アンケートは、調査期間（2025年8月下旬から同9月末日）に、こどもサポート宮ノ下・こどもサポート南野川・こどもサポート旭町に来所してきた子どもたちとその保護者を対象に行いました。

子ども 配布53名 回収49名(92.5%)

保護者 配布53名 回収43名(81.1%)

#### <回答者の校種別内訳>

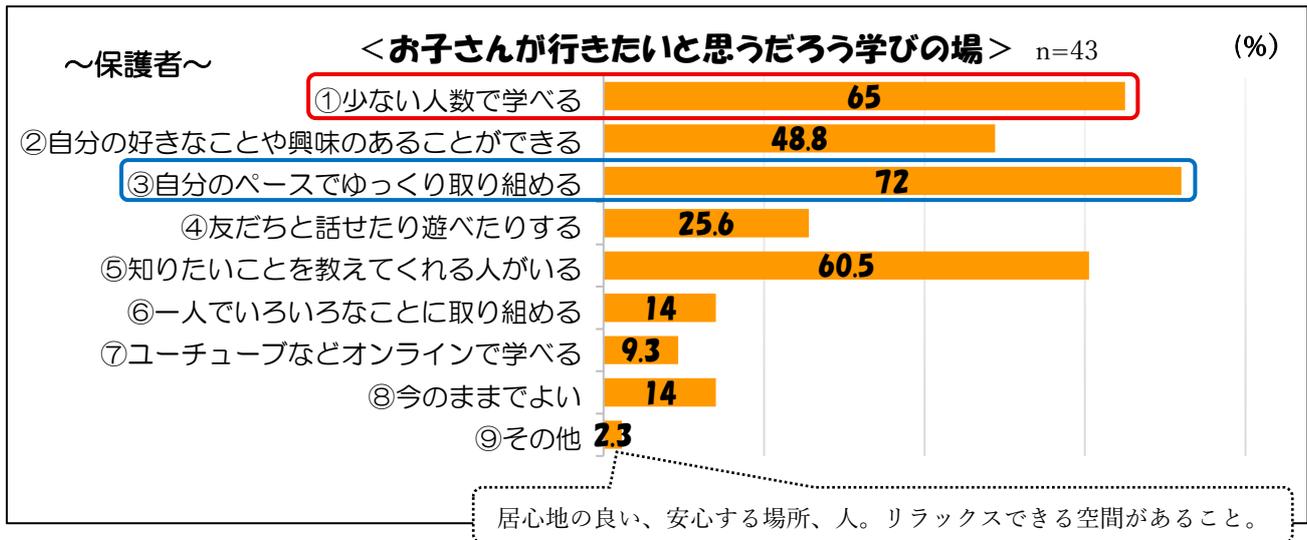
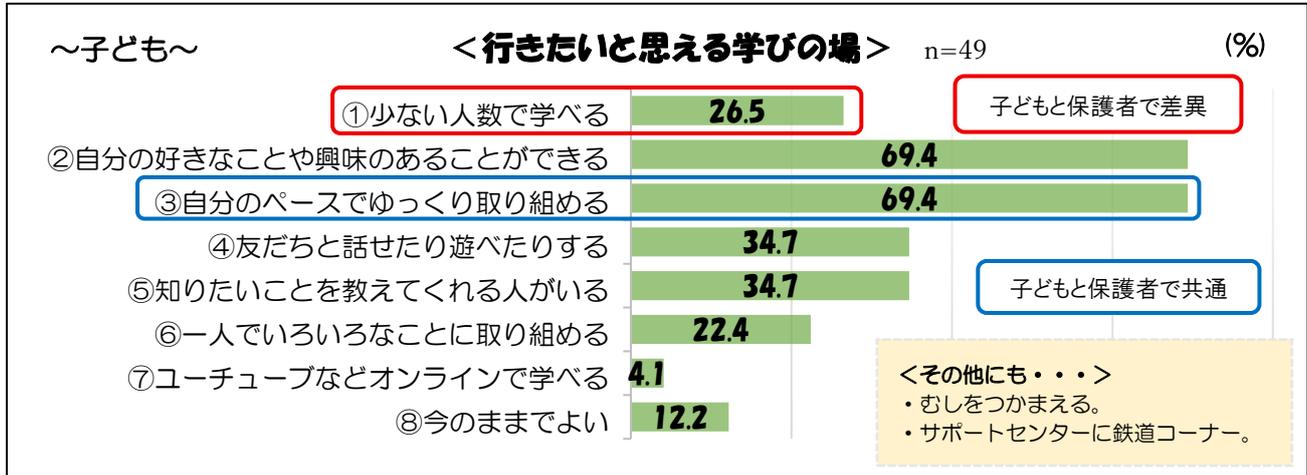


## 2 アンケート結果

※アンケートはすべて複数回答のため、合計は100%以上になります。

### (1) 学びの場について

(3つまで〇をつけてください)



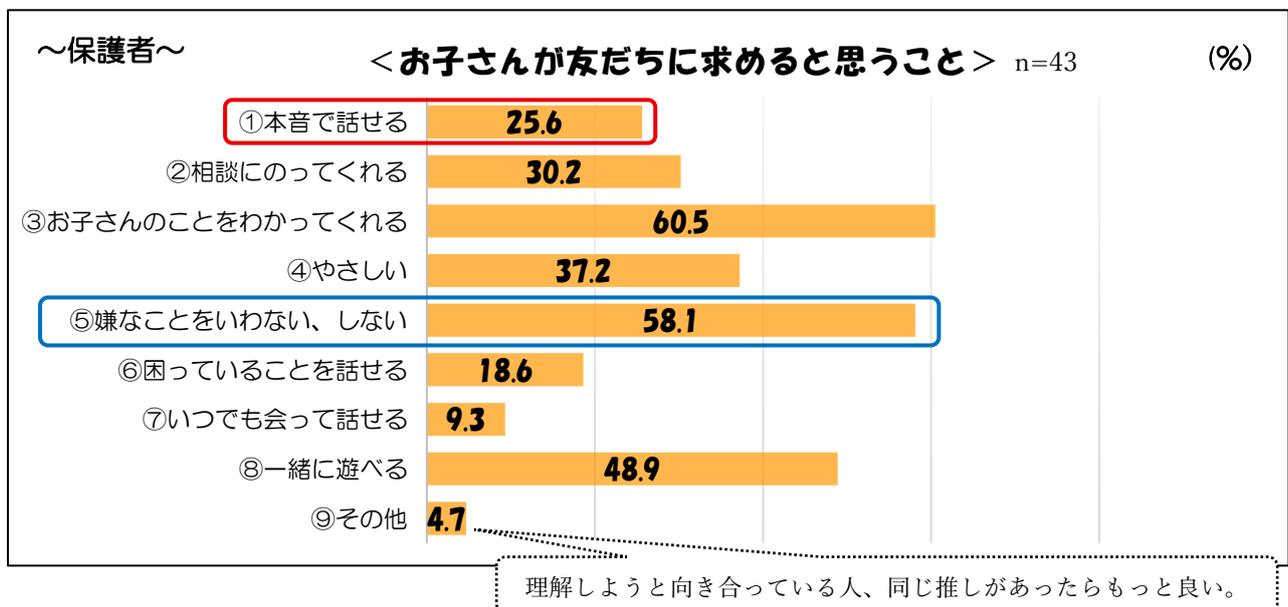
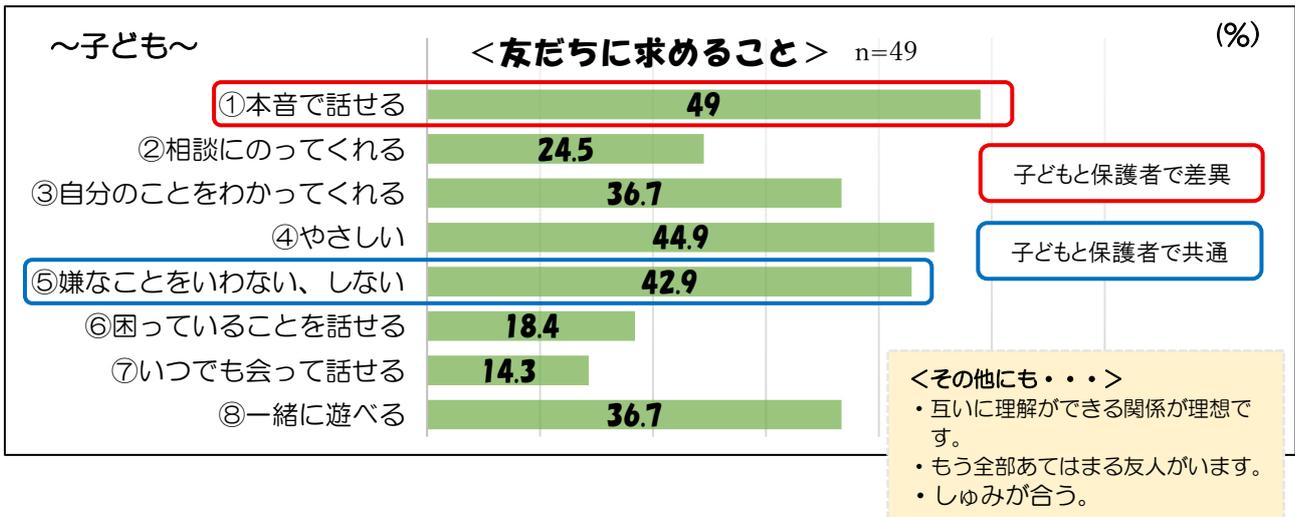
### 【子どもと保護者の声から聞こえてきたこと】

「③自分のペースでゆっくり取り組める」「②自分の好きなことや興味のあることができる」を子ども・保護者の両者とも多く選択している。また、「⑦ユーチューブやオンラインで学べる」の項目が子ども・保護者のどちらも少なく、自分一人だけで学ぶことを子どもは望んでおらず、保護者も同様に捉えていることが分かる。このことから、人との直接的な関わりをもち、画一的な学習ではなく自分の興味関心に応じて、せかさずゆっくりと自分のペースで学習したいと望んでいることが分かる。

また、「①少ない人数で学べる」ことについては、保護者は子どもが少ない人数で学ぶことを望んでいると考えているが、「①少ない人数で学べる」を選択した子どもは少なかった。昨年度、学校についてのアンケートで「教室がザワザワして落ち着かない」と回答した子どもが多かったことと反していることは意外である。さらに、「⑤知りたいことを教えてくれる人がいる」を選択した数では、保護者の方が多い。

## (2) 友だちについて

(3つまで0をつけてください)



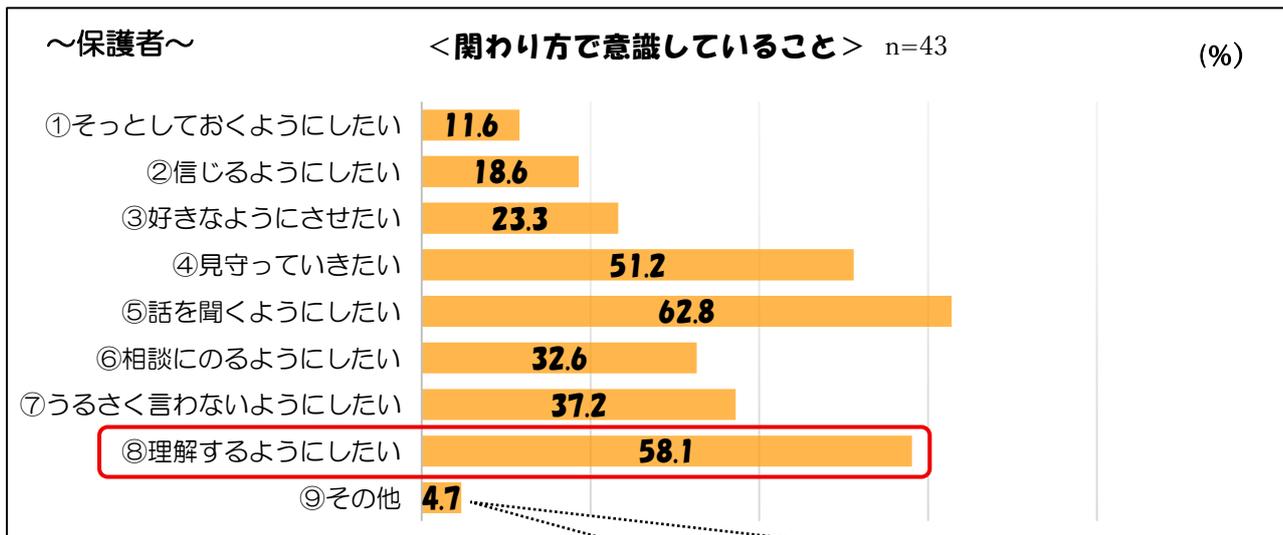
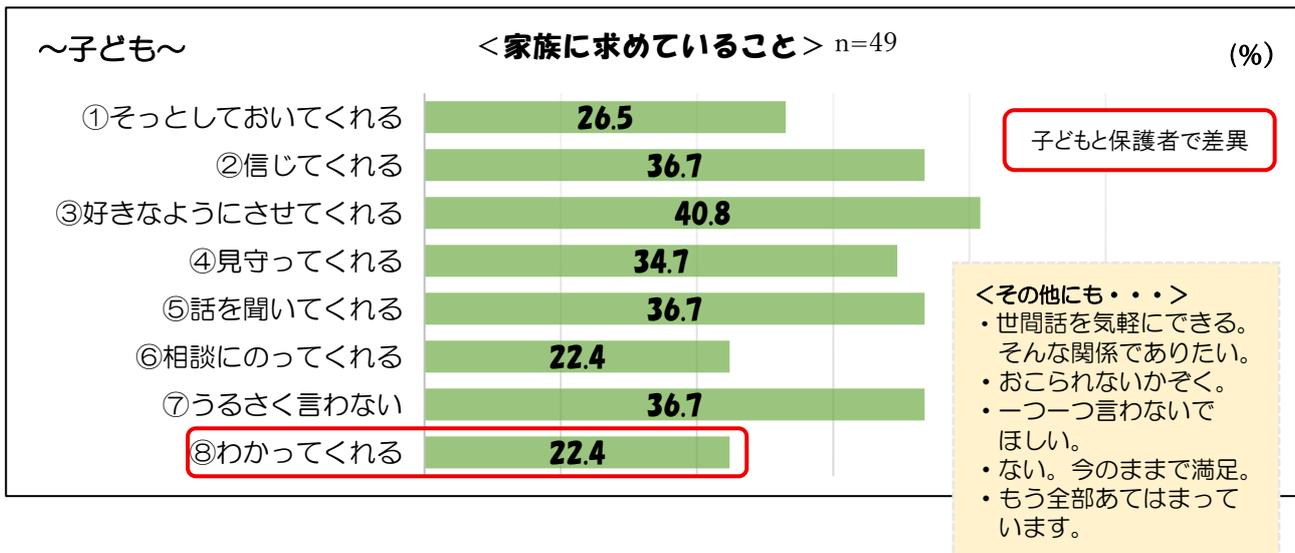
### 【子どもと保護者の声から聞こえてきたこと】

子どもへのアンケートの結果からは、「①本音で話せる」「④やさしい」「⑤嫌なことをいわない、しない」という声が多く聞かれた。子どもは、自分を全面的に受け入れてくれる存在を友だちに求めていることが伝わってくる。保護者は、「⑤嫌なことをいわない、しない」が2番目に多い結果で、子どもと共通する思いであることが分かる。しかし、最も多いのは「③お子さんのことをわかってくれる」で、子どもを理解して受け入れてほしいという保護者としての強い思いが伝わってくる。

一方、「①本音で話せる」は、子どもと保護者の結果に差が見られる結果となった。子どもからは、友だちにはありのままの自分を受け入れてほしいという思いが感じられるものの、保護者は、子どもが深く理解し合う付き合いまでは求めていないと捉えている。

### (3) 家族について

(3つまで0をつけてください)



自分で選択できるようにしたい。相手のグッドタイミングをみる。そこで提案を持ちかける、相手へ期待ではなく信頼する。

#### 【子どもと保護者の声から聞こえてきたこと】

子どもが家族に求めていることは、「③好きなようにさせてくれる」が最も多く 40.8%である。「②信じてくれる」「⑤話をきいてくれる」「⑦うるさく言わない」がいずれも 36.7%で、どの項目も大差なく要望が分散していることが分かる。

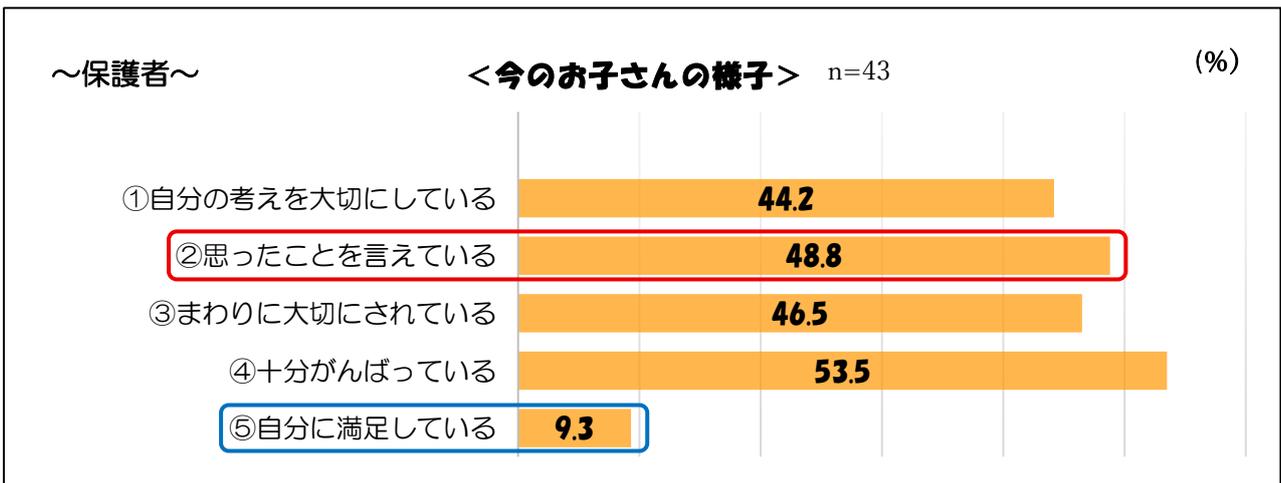
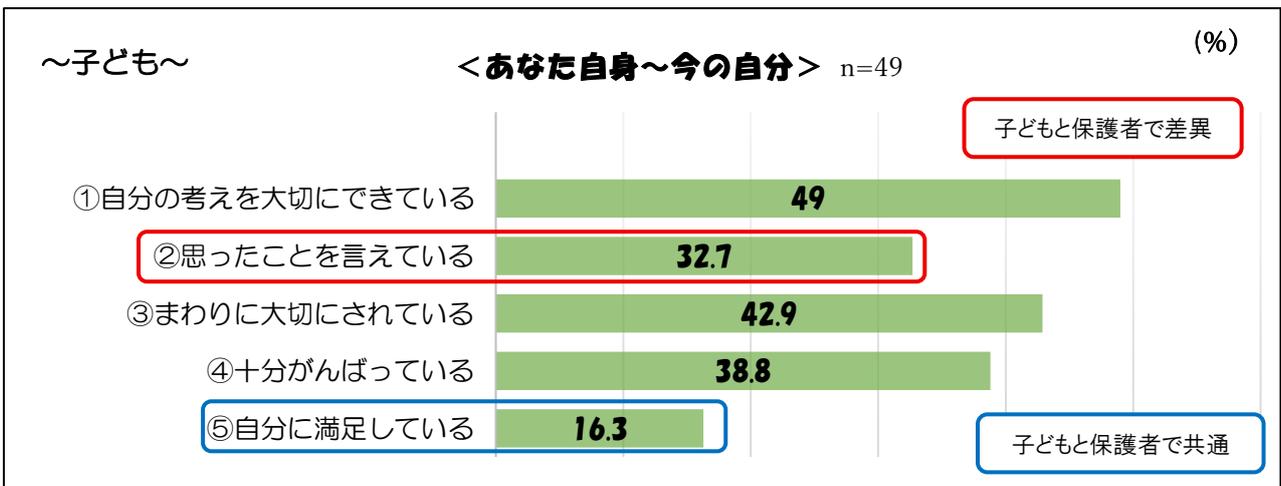
保護者は「④見守っていきたい」「⑤話を聞くようにしたい」「⑧理解するようにしたい」の割合が半数を超えている。このことから、保護者が子どもに寄り添い、子どもを理解しようとする意識の高さが分かる。

さらに、子どもが家族に求めている「⑧わかってくれる」は 22.4%と少ない。しかし、保護者の「⑧理解するようにしたい」への回答が 58.1%であることから、保護者の多くが子どもへの理解を深めようと努力していることがうかがえる。

(4) あなた自身について

**現在**

(いくつつけてもかまいません)



【子どもと保護者の声から聞こえてきたこと】

**現在**

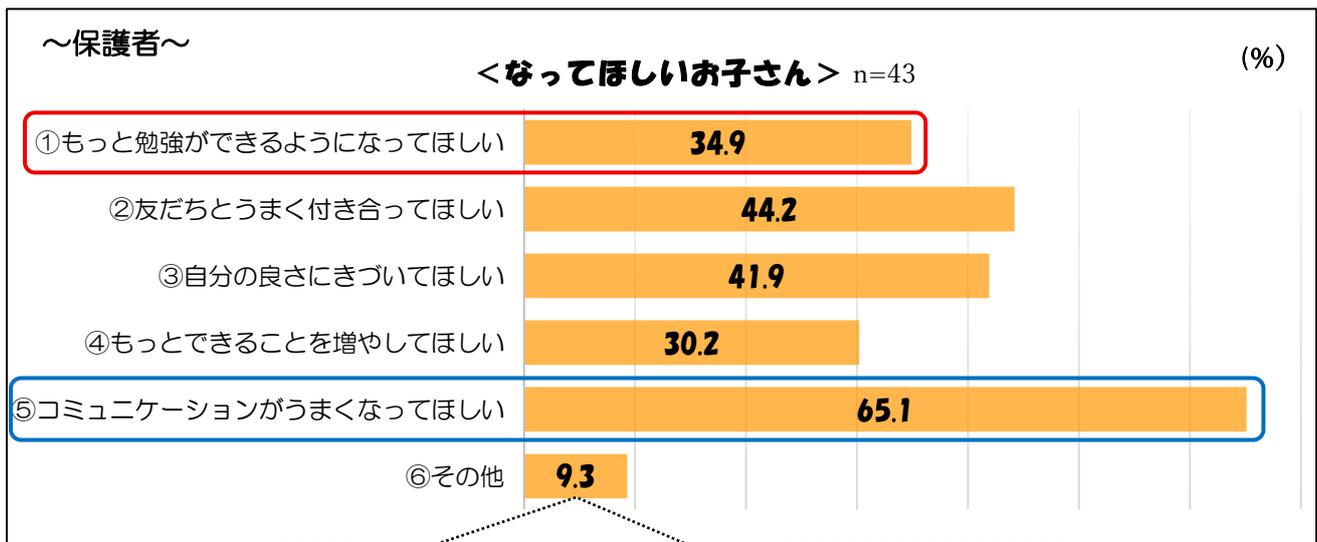
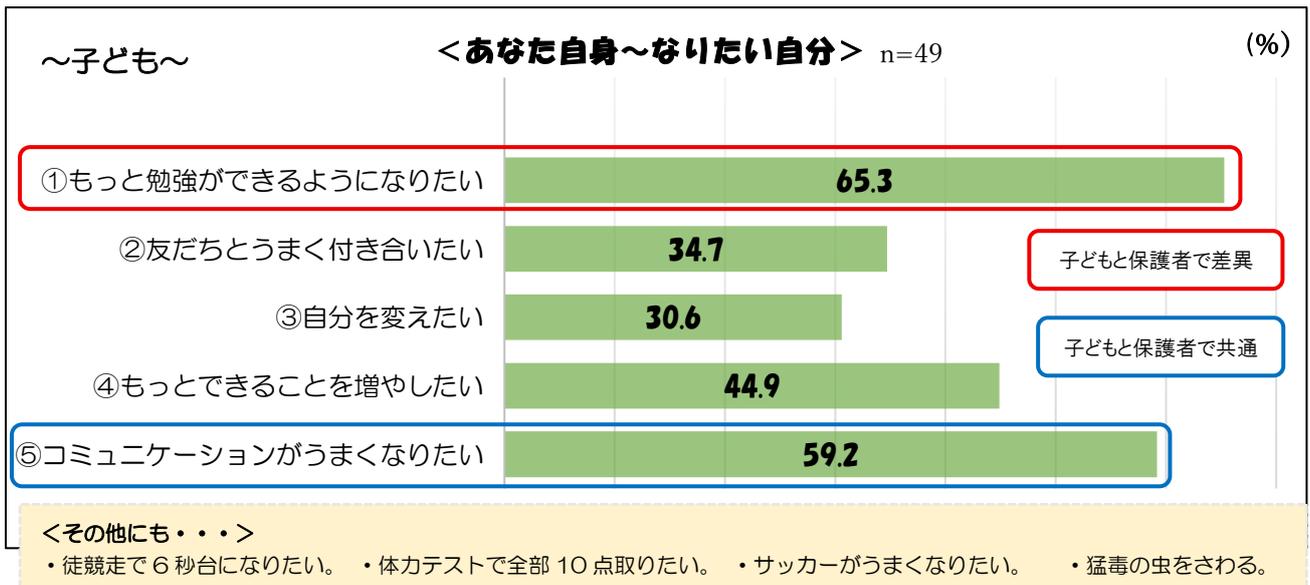
子どもは「①自分の考えを大切にできている」「③まわりに大切にされている」が多い。保護者も「④十分がんばっている」が最も多く、両者とも今の状態を肯定的に捉えていることが分かる。

しかしその一方で、「⑤自分に満足している」は子どもも保護者も少ない。また、「②思ったことを言えている」については、子どもと保護者とで違いが見られる。保護者は子どもが自分の思いを伝えていると捉えていても、子どもは十分には言えていないと感じていることが伝わってくる。



## これから

(いくつつけてもかまいません)



学校には行かなくても、自分のペースで学び続けてほしい。 無理せずについてほしい。  
今のままで十分。 もっと頑張れることに気づいてほしい

### 【子どもと保護者の声から聞こえてきたこと】

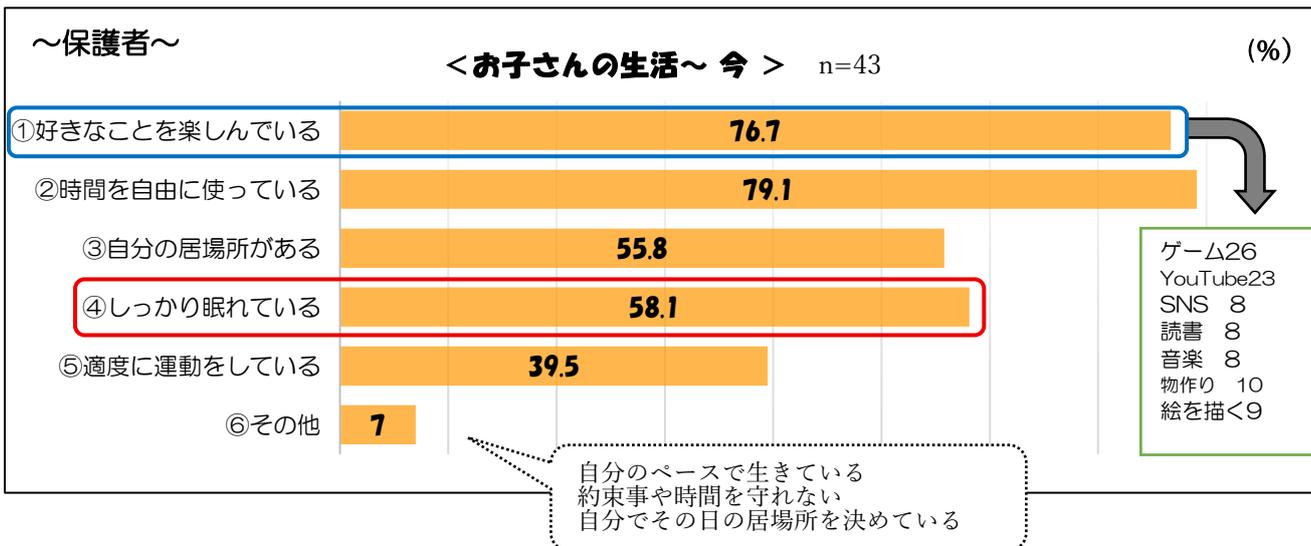
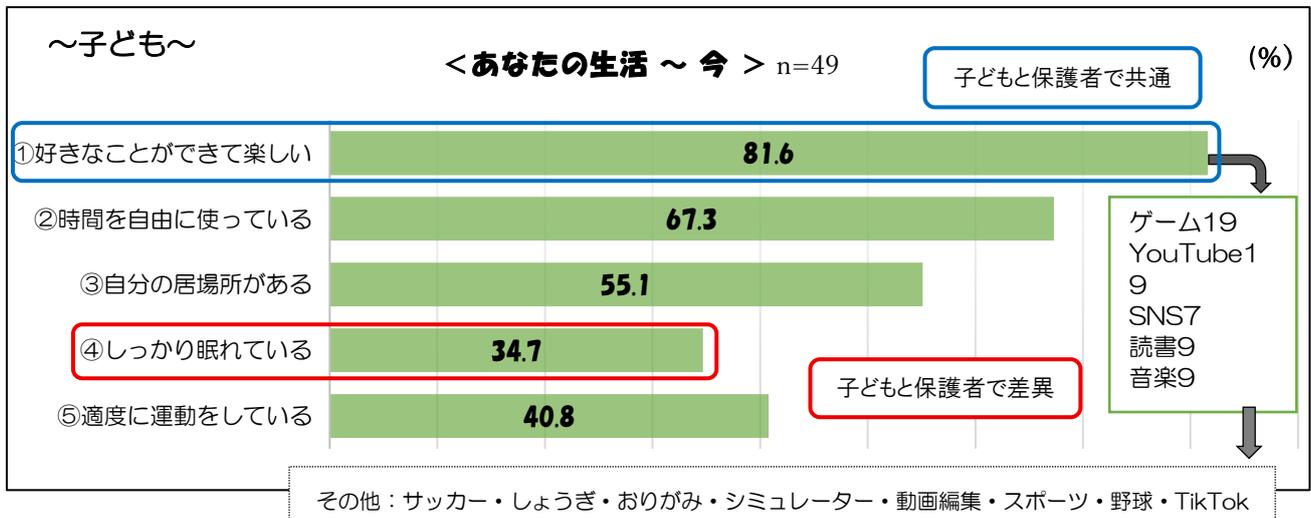
#### これから

子どもは「①もっと勉強ができるようになりたい」が多いが、保護者はそれほど多くはない。「⑤コミュニケーションがうまくなりたい」「⑥コミュニケーションがうまくなっほしい」は両者とも多い。このことから子どもは学習や対人関係に不安があり、それが今の自分に満足していない要素の一つだと考えられる。そして、保護者は、勉強よりもコミュニケーション能力を高めたい、人間関係を広げたり深めたりして欲しいと願っていることが伝わってくる。

(5) あなたの生活について

**現在**

(いくつつけてもかまいません)



【子どもと保護者の声から聞こえてきたこと】

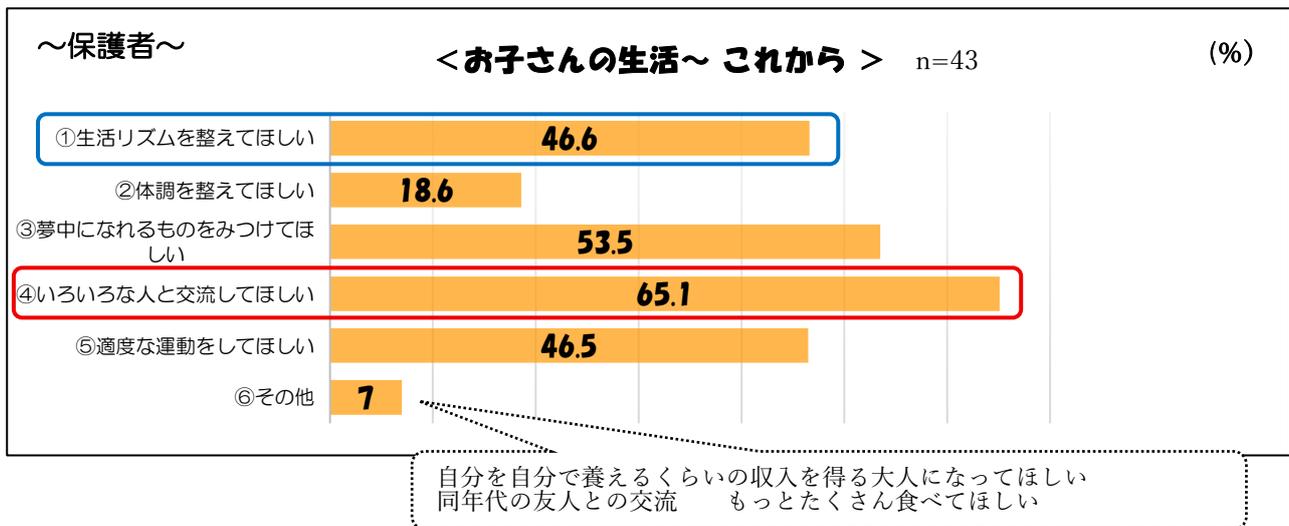
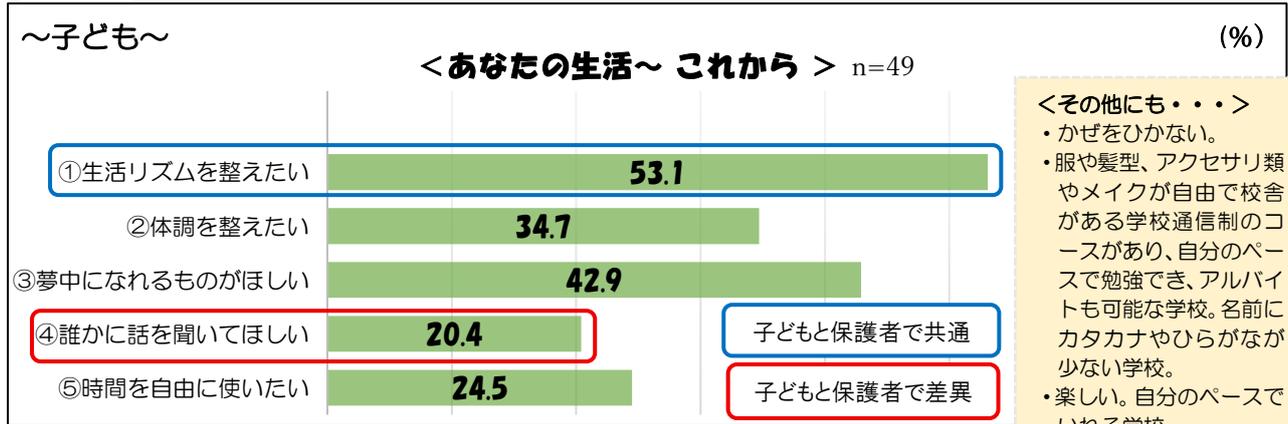
**現在**

両者とも「①好きなことができて楽しい」「①好きなことを楽しんでいる」と「②時間を自由に使っている」が多く、時間を自由に使いながら好きな事をしている生活の様子が見える。

一方で「④しっかり眠れている」では、子どもの回答が34.7%であるのに対して、保護者の回答が58.1%と比較的多く、違いが見られる。このことから、子どもは量的にもっと眠りたい、睡眠が浅いと思っているが、保護者は質量ともに睡眠が十分にとれていると考えている。

## これから

(いくつかつけてもかまいません)



## 【子どもと保護者の声から聞こえてきたこと】

### これから

子どもは「①生活リズムを整えたい」が最も多く、保護者も「①生活のリズムを整えてほしい」が比較的多い。両者とも生活のリズムを整えることが自立に向けて大切だと感じていることが分かる。

保護者の「④いろいろな人と交流してほしい」は65.1%と多く、人とふれあいながらコミュニケーションをとって交流していくことを一番に望んでいる。しかし、子どもは「④誰かに話を聞いてほしい」が少なく、他者との関わりを望んでいるのは保護者の3分の1以下になっている。



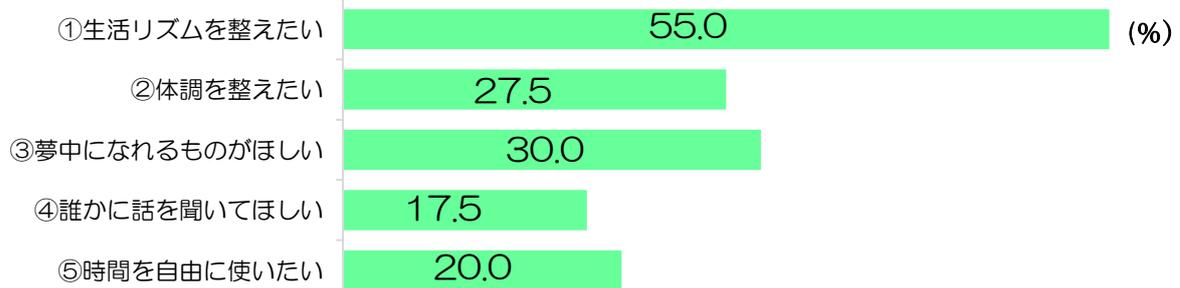
## ＜あなたの生活について＞を深掘りしてみると

p13＜あなたの生活について＞「現在」からは、子どもが時間を自由に使いながら好きなことをして、生活に満足している様子がうかがえました。ところが、p14＜あなたの生活について＞「これから」では、子どもが生活のリズムを整えることを望んでおり、現状に満足しつつも、改善したいという子どもの抱えている複雑な思いを感じました。

そこで今回、p13(5)＜あなたの生活について＞現在「①好きなことができて楽しい」と「②時間を自由に使っている」の両方を選択している子ども・保護者が、これからの生活についてどの項目を選択しているのかを、更に探ってみました。

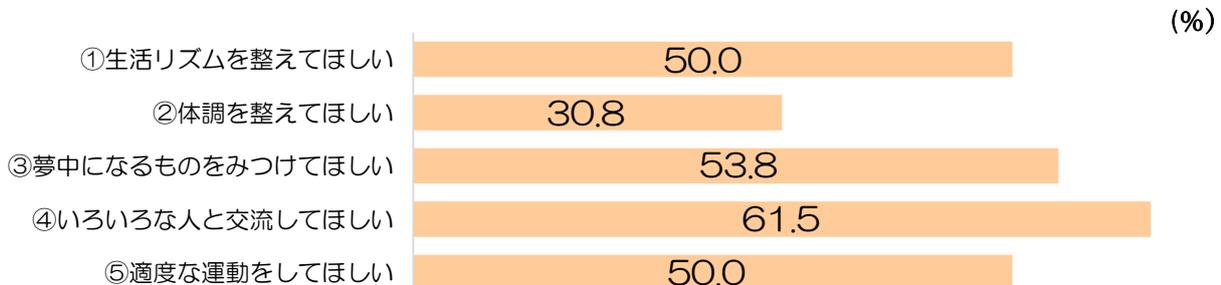
～子ども～

(5)＜あなたの生活について＞現在好きなことができて楽しく、時間を自由に使っている子(32人)がこれからどのような生活をしたいかを選択したか



～保護者～

(5)＜あなたの生活について＞現在お子さんが好きなことを楽しみ、時間を自由に使っていると思っている保護者(26人)が、子どもにこれからどのような生活を送ってほしいかを選択したか



### 【深掘りしてみえてきたこと】

子どものグラフを見ると「①生活リズムを整えたい」が55.0%で最も多く、時間を自由に使いながら好きなことをしているが、生活のリズムを整えることを望んでおり、生活実態を改善したいと考えていることがわかる。このことから、子どもが自立に向けて抱えている課題やジレンマがあるのではないと思われる。

前述のp12＜あなた自身～なりたい自分＞で見られたように「①もっと勉強ができるようになりたい」や「⑤コミュニケーションがうまくなりたい」と同様、自分がこれから自立していくためには勉強やコミュニケーションだけでなく、生活リズムを整えていくことも大切であると子どもが捉えていることが分かる。

p14の保護者のグラフを見ると「④いろいろな人と交流してほしい」が最も多く、子どもとの意識のずれを見ることが出来る。しかし、この回答と他の回答に大きな違いはない。これは自立に向けてコミュニケーション能力を身につけることは重要だが、他にもその子に応じて様々な力を身につけてほしいという保護者の思いが反映されていると考えられる。

(6) (子ども) あなたが求める学校とは、どのような学校ですか。思っていることを自由に書いてください。

- 子どもたちのことを口は挟まないけど、ちゃんと監視しててほしい。
- 分からないところを聞ける空気、先生がいる学校（授業中、放課後）  
集中して取り組める静かな場所がある学校（放課後に使える自習的な所）  
自身のこと、家族のこと、勉強のことなど色々話せる先生がいる学校
- ちゃんと子供たちのことを監視していてほしい。自分のペースをそれなりに保てる。
- 先生がいつでも助けてくれる。
- 先生が嘘つかない。
- 先生が自分のやりたいようにさせてくれる。
- 良い意味でのやさしさを先生もじゅうぶんりかいし、個性をみとめあい、小さなしあわせを日々みつけられて、こまっている人がいたら、そっととなりにもられるような学校→あたりまえをきょうちょうしない。
- 答えがないものについて考える時間などがあってもいい。
- 少人数で一人一人にあった授業をしてもらえること
- 自分の学びたいことも学べるところ。
- 少人数で、自分のペースで勉強できる学校。
- 自由な学校、自分の好きなことをできる学校、自分のスピードで学べる学校
- きゅうしょくをもっとふやしてほしい
- 今の学校がいい
- 今のままでよい
- せまいとこ。こうないをでかくしないでください。しゅくだいへらして。（給食の時）グミもっていきたい。（おやつ時間を下さいという意味）iPad 持ち込み可にして。きゅうしょくのじかんももっとくれ。いらぬきょうしつへらして。じゅうじかんももっとくれ。ダイソーをつくってください。3じかんじゅぎょうにしてくれ。
- ここみたいな所（少ない人数で学べる、自分のペースで学べる）
- 冷房がきいている学校
- 色々なことが学べる場所
- ふつうの学校（今のままでいい）
- 困っていることを話せる学校が良いと思います。いじめがおきない、いやなことを言わないしないうところが良い学校だと思います。
- 友達をうまくつくれるような学校
- 誰もいない学校（誰かいるだけで気分が悪くなる）
- きょうしつやこうていを広くしてほしい
- いじめがなく、助け合いができる学校
- 一人ひとりノ思いを大切にしてくれる学校
- しずかで相手のことを考えられる人が多い学校
- いやなやつがない。
- みんな仲がいい学校がいい。
- ふわふわのカーペットが欲しい。
- みんながやさしい。
- 安心して通える学校。信頼できる人がいる学校。

(6) (保護者) あなたが求める学校とは・・・

自由に記述してください。

- どんな子どもにも居場所がある
- こどもが相談したいと思える環境
- 先生に相談しやすい雰囲気がある。
- 何か困った事があっても、担任の先生やわからない事などがあれば、相談できる関係性をもてる学校でいて欲しいです。
- こどもたちみんなで楽しく過ごせる学校作りをしてほしい。
- 好きなことをたくさん学べる環境
- 本人のペースで学ぶことができる、他の人と比べられない場所。
- なるべく自主性に任せて強制することがない学校
- オンライン授業の強化
- 教えてもらうのではなく、一緒に考え、答えを探していく
- いろいろなことを学び体験できる出会いの場
- いろいろな考えがあることを知ること
- お互いにいいところを認め合える生徒が集まる学校
- 協力することで大きな力になり大きなことも成し遂げられることを体験できる
- 小学生のうちには学校が楽しいと思いながら、勉強も楽しみながらのびのび過ごしてもらえたら嬉しい
- 一人一人個性を活かして学校を過ごせる。
- 自分で考える力を身につけることを学ぶ場であってほしい。
- 友達とたくさん動かして遊べる場であるといいです。
- 本人の学力のレベルにそって学べる環境が欲しい。
- 分け隔てなく、その子の能力に合わせて学べる場所
- インクルーシブ教育がある以前に、子どもたちに色々な人がいることを教えたり、考えさせる時間をかけてほしい
- 1人1人が自分で選べる、ある程度自由な学校
- オンライン配信も取り組んでくださり感謝申し上げます。
- どんな子どもでも取り残すことなく、寄り添い受け入れてくれる学校。
- 先生によって、不登校に対する理解度や親への対応に差があると感じます。不登校に対する理解を深めてもらいたいです。
- 先生も生徒も同じ目線
- 人生の先輩としてアドバイスをくれる先生がいるところ
- いじめを未然に防いでくれる 対処療法でなく
- 先生自身が未熟で、謝ることが出来ていない。それを子供には要求する。
- マニュアル通りに対応するがそれ以上のことはしない。
- 真摯に子供と向き合ってくれる先生がいない。
- 取り出しのサポーターの増設
- PTAがない(2)
- 全ての子供が安心して通える学校
- 一人一人に対応できる学校
- 自分の存在価値を感じ、自信が持てる環境の学校
- プレッシャーが少ない学校。
- 他の子と比べて出来ないことが多くても劣等感を感じさせないようにする学校
- 少人数制のクラスを増やして欲しい。
- それぞれの子どもに合った教室があるといいと思います。例えば仕切られた机がある教室で、授業をライブ配信でみられる、など。
- 生徒の困っていることに気づき先生と保護者とで連携が取れる学校。
- 愛があって安心できる場所・自分の存在価値を感じ、自信が持てる環境の学校
- 30人以下学級くらいが理想ですが、基本的には今の川崎市の公立学校の先生方は頑張ってくださいって私たち家族は、小中の保護者ですが満足しています。
- 型にあてはめるのではなく、もっと個人が尊重される学校であってほしい。
- 取り出しのサポーターの増設
- 通信制の小学校
- 寺子屋の現代版、年齢バラバラ、少人数・・・。



### Ⅲ 3つのこどもサポートでつくる多様な学びの実践事例

サポートセンターでは、宮ノ下、南野川、旭町の3つの「こどもサポート」で、子どもたちに学びの場、居場所を提供しています。各「こどもサポート」では、「子どもの声を聞く」ことを大切にするというスタッフの姿勢を共有しながら、各施設の特徴や子ども・保護者の声を生かし、それぞれ異なった形態の支援を提供しています。

「こどもサポート宮ノ下」は、教育相談と1対1での学習支援を行っています。保護者・子どもとの初期の面談を教育相談担当スタッフが先行し、その願いや思いを生かして教科や学習内容、学習支援スタッフを決めていきます。学習は、月曜から金曜の9時から18時まで、宮ノ下のサポートセンター内で実施し、1回1時間、週2回までを原則としています。子どもは、決まった曜日、時間に来所し、決まった学習担当スタッフと学習しています。



「こどもサポート南野川」は、南野川小学校の一角の旧幼稚園舎で、開室時間内はいつでも利用できる居場所を提供しています。開室時間は火曜から金曜の9時から16時です。庭に畑があり、1年を通して野菜を育てています。また、卓球や調理、理科実験ができる設備もあります。それを生かして様々な活動やイベント、学習支援を行っています。ここでは、子ども同士の関わりを楽しむ姿も見られます。

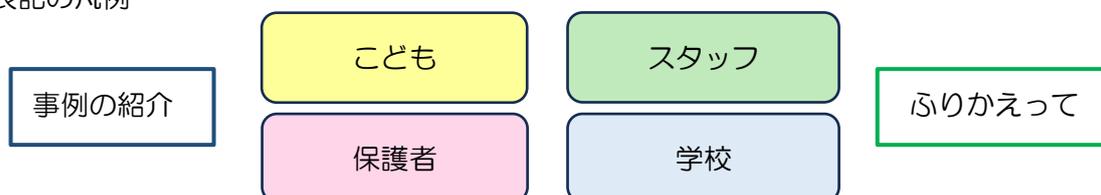


「こどもサポート旭町」は、旭町こども文化センターの1フロアで開室しています。開室時間は、月曜から木曜の10時から16時で、その間は子どもが好きな時間に利用します。学校から帰ってこちから来ている子どももいます。和室でのんびりしたり、勉強をしたり、子ども同士で遊んだり、自由に過ごしています。餅つき、茶道の体験など様々なイベントも行っています。学校と旭町を自分に合うように組み合わせて活用している子どもの姿も見られます。



ここに掲載した実践事例では、それぞれの「こどもサポート」で、私たちスタッフが子どものどんな声を受け止め、その声に応えてどのような学びを作ろうとしているかを紹介しています。それを子どもに関わる様々な立場の方たちと共有し、「子どもの多様な学びに寄り添う支援のあり方」について、共に考える手がかりとなることを願っています。

#### ◆事例表記の凡例



## 1 一人ひとりの学びに寄り添う「こどもサポート宮ノ下」

「こどもサポート宮ノ下」(以下「宮ノ下」)では、最初に子ども、保護者と面談をします。

「学校を休んでいて勉強が心配」「高校には行きたいけど、どうすればいいかわからない」「学校には行きたいけど学校の生活についていけない」などの悩みが子どもや保護者から聞かれます。不安とともに一步踏み出したいという思いも伝わってきます。相談担当のスタッフが話を聞き、一緒にできることを考えます。子ども自身が「ここでやってみてもいいな」という気持ちになったら、学習支援のスタッフを決め、学習を開始します。相談担当と学習担当のスタッフは、できるだけ子どもの思いや今の状況を共有し、複数の目で子どもを見守りながら支援を続けます。

### 事例1 好きな「ものづくり」から学びをひろげるAさん(中3)

Aさんは、中1の体育祭が終わる頃「もう疲れた」と学校に行かなくなりました。勉強のできる場所を探して最初は保護者だけが来所し、その後、「好きな工作ができるなら」とAさんも来所しました。相談担当と面談し、好きな「ものづくり」を始めることになりました。

Aさんの思い  
図工は好きだけど、その他の勉強はやりたくない。

保護者の思い  
苦手なことがあるから、学校での学習は難しい。通いたいと思える居場所を探している。



鉄道が好き！電車の車両をつくりたい。  
本物の写真の通りにつくっていくよ。

Aさんが考えているイメージを聞いて、ヒントになるような材料や用具などを準備しておこう。



Aさんは、定規で測ることは苦手で、ほとんど使いませんが、きちんと組み立てられる部品を作っていきます。細かいところにもこだわり、納得できないと初めから作り直すこともあります。Aさんの頭の中には設計図や作業計画があり、それに合わせて進めていることが、支援スタッフにもわかってきました。Aさんは、継続して「宮ノ下」の学習に来るようになりました。

Aさんの得意なこと、苦手なこと、もっと良くしたいという意欲がいろいろ見えて、彼の持つ力に感心しています。助言やヒントを伝えることもあるけど、任せて見守っていることも多いです！



中3になるから卒業後のことを家族で話すことがある。少しは勉強しなくてもは、と思うけど…でも勉強は嫌だし、やりたくないし…

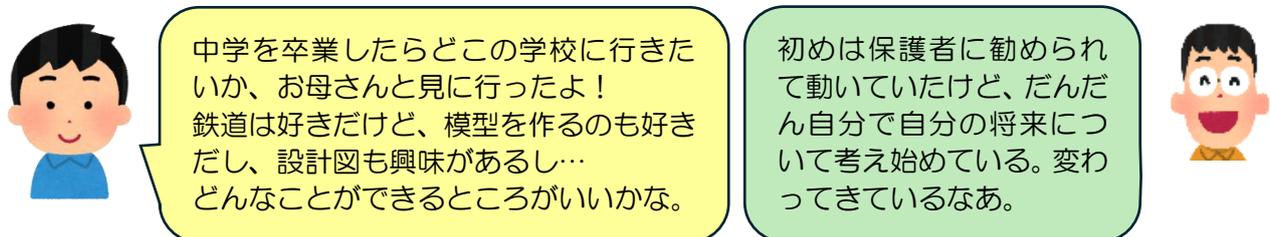
じゃあ、鉄道の駅名や地名の漢字から始めてみようか。



Aさんは、駅名や地名の読み方から、県名や特産物、電車の時速の計算など、少しずつ国語・数学・社会などの学習も始めました。勉強は嫌いと言いながらも、鉄道への興味から、少しずつ教科学習にも取り組みました。1日1時間の原則ですが、Aさんに合わせて学習時間を2時間連続にし、教科の内容と工作の時間配分を、Aさんの様子を見ながら考えて進めました。



かけ算九九も経験させたいな…と思い、九九表を用意し、それを見ながらやる方法を伝えると、次からまた計算問題に取り組むようになりました。九九に慣れてきたら、いつの間にか九九表は使わなくなりました。



#### ふりかえって

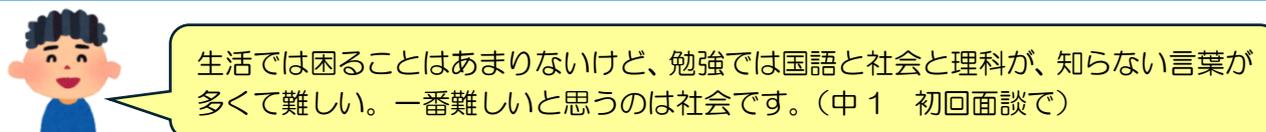
Aさんは、作品づくりの過程で、写真を見てその設計図を頭の中に描くことができる、設計図から立体にイメージを持つ、組み立ての順番を考えることができるなど、素晴らしい力を発揮していました。学習支援スタッフは、活動を通してその力に気づき、それをAさんにも伝えてきました。

Aさんは、学習支援スタッフと話すことで、自分の気持ちや考えを整理し、自分のつまずきや困難の原因に気づき、それを解決して来所を続けています

Aさんは、その力ややりたいことをどのように自分の将来につないでいくか、家族や友人、周りの大人とかかわりながら考えを深めています。学習支援スタッフは、「宮ノ下」での気づきを保護者とも共有しながら見守っています。

## 事例2 「これ、どういういみ？」と聞いたBさん(中2)

Bさんは、小学校中学年の時に、南アジアの国から日本に来ました。中学に入学する頃には、日常生活に困らないくらい日本語ができるようになっていました。でも、学年が上がるにつれて学習では分からないことが増え、中学では、授業を真剣に聞いていても理解ができず、定期テストでも苦労しています。



生活言語は小学校生活を通して身につけてきました。小学校では、何とかみんなと一緒にできるので、それほど困り感は強くなかったけれど、中学では、各教科の専門用語や、授業で使われる学習言語が増えてきます。Bさんの母国は漢字圏でないため、漢字も大きなハードルになっていました。

Bさんと相談して、社会と国語の学習を始めることにしました。

日本語の会話はかなりできているから、質問したことはわかると思うけど、曖昧な返事が多い。「ここが分からない」とも言わないし、何を困っているのかな…（社会科担当スタッフ）

「国語の何が難しい？」と聞くと「漢字がわからない」という答えでした。小学校1年生の新出漢字で確かめると、半分ほどしか読めませんでした。漢字は毎回少しずつやっていくことでBさんも納得して始めました。（国語担当スタッフ）



初めて聞く言葉が社会にはたくさん出てくるからよくわからない。



漢字にふりがながついていても意味が分からないし、漢字を覚えるのは大変だ。



日本についての知識が少ないことに気づきました。日常生活で自然に身につけてきている情報も蓄積されにくい。試験前には、試験範囲の内容に加え、日本人の常識も意識して覚えなくてはならず大変ですが、よく頑張っています。

新幹線は乗ったこともあるし、大阪も知っているよ！



英語で言ってもらったら少しわかった！

学習支援スタッフ、相談担当スタッフでBさんの状況をよく話します。保護者から「今日は母国のお祭りで休みます」という連絡があった時には、それぞれ学習の時にBさんにお祭りのことを聞きました。お祭りの話をするBさんは、明るい表情で、くわしく話していました。

小学校の漢字から、文字の組み立て、意味、熟語などに広がっています。音読も小学校の教材で、言葉の意味も確かめながら読んでいます。試験前は覚えることが多いので、「ここは覚えておこう」というところを伝えました。



この前、Bさんが初めて自分から「これ、どういう意味？」ときいてきたんだよ。今まで、「この言葉の意味、わかる？」とこちらから聞いていたんだけど、自分から聞いてきたのは初めてだった。

この頃、社会科でも、わからないことは「わからない」とはっきり言うことが多くなってきたよ。前は「わからない」と言えなくて曖昧に返事をしていたんだなあ。



学びの姿勢が変わってきたね。自分から「学びたい」という気持ちを感じる。

#### ふりかえって

Bさんの変化が出てきたのは、学習担当が、Bさんが今どんなことに困難さを感じているか、少しずつわかってきた頃でした。学習に来た時に、体調や母国の話も聞き、Bさんのいろいろな面に触れる会話をすることで、Bさんは自分が理解されていると感じたことと思います。それが安心感となって、Bさんは自分から質問することができたのではないかと考えます。

ほんの一言ですが、自分から動き出す瞬間は、実は大きな変化の瞬間だと感じています。

### 事例3 中学時代をふりかえるCさん（高1）

Cさんは、中学1年の秋から中学卒業まで「宮ノ下」で学習をしました。途中、来られない時期もありましたが、その後は定期的に来所し、現在は高校生です。  
高校生になった今、自分の小・中学校の頃のことをどう思っているかを聞いてみました。



中学に行かなくなった頃の様子を教えてください。

小6の時に友人の影響で進学塾に行き、その流れで中学受験、私立中学に進学しました。



中1の初めは、授業が1日6~7時間、部活も2つ入り、帰宅後は塾。午後10時頃、急いで夕食を食べる毎日でした。自分で選んだ生活ですが、忙し過ぎたと思います。疲れて夏休み明けから登校しなくなりました。学校に行かなくなっても、電車に乗って好きな「街歩き」はしていました。

「宮ノ下」に来たきっかけは？

親から「こういうところはどう？」と「宮ノ下」を勧められて見学に行き、通うことにしました。神奈川県の不登校相談会での情報だったと思います。その頃は、学校には行かないけど、塾と家で、自分で勉強をしていました。

来られない時期もありましたね。

トイレや地震などの不安が強くなり、家にいることが多くなった時期がありました。

家ではどんな生活でしたか？

ネット動画の高校生向けの日本史にはまり、2か月程、毎日10時間くらい見ていました。学習塾の無料の番組がおもしろく、歴史に興味が出てきました。

「宮ノ下」の学習はどうでしたか？

1対1での学習なので、やりたいことが自分のペースでできました。やりたい問題集を持っていき、やっていました。集団の中で手を挙げてみんなの前でわからないことを聞くというのは、抵抗や恥ずかしさなどハードルが高い。サポートセンターだと、「ここをもう少し説明してほしい」と言いやすいです。自分に合った進度で学習できるのもよかったです。

中3になって、「苦手」と言っていた国語の学習を始めましたね。

国語が苦手だったのは、中1の頃まで自分が本を読まなかったからだと気づきました。

中3の頃は本を読むようになっていて、長い文章も抵抗がなくなったし、読めば意味がわかって興味もわいてくるようになりました。それに、苦手だからこそ逆にやりたいとも思いました。

「宮ノ下」に来る以外は、どんなところで過ごしていましたか？

「宮の下」に通うようになって、その近くのフリースペースにも行き始めました。そこでは顔なじみのスタッフと話をすることが多かったです。

そこでは、子どもは毎日入れ替わるから、子どもとの関わりはあまりなく、スタッフとの話や自分の好きなことをして過ごしていました。高校に入ってからも行っていて、本を読んだりスタッフと話したりしています。今は、自分と同年代の人とも話しています。

学校での勉強は必要だと思いますか？

学校での勉強は、導入としては有効だと思います。特に小学生や中学生の時は、どんな勉強の分野があるかあまり知らないから、いろいろな分野を知るきっかけとしてよかったです。でも、その先は自分の好きなことを選んでやりたいです。

家族との関係はどうでしたか？

父母には「学校に行け」とは言われませんでした。電車通学の経験があったので、小田急線沿線の街歩きも心配されませんでした。旅行や写真が好きなので、母と一緒に旅行に行くこともあります。自分がバスに乗るのが苦手なので、1日30km近く歩くこともあります。母と一緒に歩いています。

将来について考えていることは？

父は研究者で、以前は自分も工学か土木設計の研究者になりたいと思っていました。最近は歴史に興味が出てきて文系もいいかなと思っています。将来は、研究者として好きな分野の研究を続けられたらいいかなと思っています。



### ふりかえって

Cさんは、やりたい勉強を自分のペースでやれるから、と「宮ノ下」に来ました。一時中断ありましたが、通所を再開してからは、熱心に学ぶ姿とともに、学習時間の終わった後、スタッフと好きな旅やカメラの話をするが増えていきました。スタッフもCさんの話を聞くのが楽しみでした。学習の場とともに、スタッフとの関わりも子どもの学びを支える大きな要素であることを実感しています。

## ■「こどもサポート宮ノ下」の多様な学びと支援

学校とは違った形での学習支援の提供が、「宮ノ下」の特色です。サポートセンター設立以来、ここからできることを考えて実践を続けています。不登校に対する社会意識、子どものニーズの変化によって少しずつ形が変わっていく部分はありますが、「子どもに寄り添って、一人ひとりの学びを支えていきたい」という基本の考えは変わりません。

現在、不登校児童生徒の増加が続いていますが、それぞれの子どもの思いは違います。一人ひとりの子どもに向き合って、時間をかけて「子どもの声」を聞き、どんな思いを抱えているか、どんな支援が必要かを一緒に考えています。

事例からは、時間・場所に加え、1対1での学習支援だからできることが大きいとわかります。学力を高めることよりも、最初の一歩を踏み出すことが重要であること、手は出さず見守ったり、長い時間待たたりすることが時には必要であること、でも子どもを一人で放っておくのではだめなこと、それらにあらためて気づかされました。

AIが活用される今、社会の流れに逆行するようですが、これからも人が向き合うことを大切にしたい支援を続けていきたいと思えます。

最後に、宮ノ下で実施している支援をまとめてみました。

### ◎1対1の学習支援

- ・その子どもに合った学習の場を用意して支援を実施
- ・人との関わり、安心感・意思表示・自ら動き出す・放任ではない見守り、助言

### ○複数の支援者による支援

- ・一人の子どもの情報をその子どもに関わる相談担当・学習支援担当で共有
- ・相談スタッフの情報共有、学習支援スタッフ全員での支援についての共通理解  
→学習相談部会（月1回） 学習支援・相談担当者全体会（年3回）

### ○保護者との連携

- ・初回面談から保護者のサポートも継続、必要に応じて保護者との相談・情報共有
- ・保護者会の実施（年3回）

### ○他のフリースペースや諸機関との連携

- ・他のこどもサポート（サポートセンターが運営する居場所）、フリースペース「えん」（公設民営の居場所）、ゆうゆう広場（教育委員会が運営する居場所）などとの併用
- ・学校、SSW、市総合教育センター教育相談センター、区役所地域見守り支援センターなどの公的機関との連携



## 2 様々な体験ができる「こどもサポート南野川」

「こどもサポート南野川」(以下「南野川」)には、用途が異なる4つの場があります。スタッフ会議、保護者面談、調理実習などに使用している「スタッフルーム」、子どもの学習に特化して使用している「学習室」、卓球台、書籍(マンガを含む)、ピアノ、各種ゲーム、理科実験器材などがあり、遊び、読書、理科実験などに使用している「多目的室」、そして、一年を通して様々な野菜を栽培している「畑」です。「南野川」では、これらの場を、子どもたちの居場所、学習の場、遊びの場、そして様々な体験の場として活用し、子どもたちに多様な学びの機会を提供しています。これらの場での様々な活動を通じ、子どもたちは変化し成長していきます。

### 事例1 卓球をした後でたくさん話をするようになったDさん(中3)

中学2年生になったDさんは、背が高く、髪の毛を刈り上げたとてもスポーティーな感じの少年でした。最初はおとなしい感じの少年でしたが、少しずつ活動的になっていきました。予定していた勉強を終えると、「先生、いま卓球できますか?」とスタッフに都合を聞き、卓球台のある多目的室でピンポン玉との格闘に多くの時間を費やすようになりました。

先生、いま多目的室で卓球  
できますか?



スタッフと接する時間をたくさん持ち  
たいのかな。

卓球をしている時は、いつもすごく  
楽しそうだな。

卓球を終えると、多目的室のソファに腰かけ、自分のことについてスタッフに話すようになりました。たくさん話をすることで、少しずつDさんの気持ちが和らいでいく様子が見てとれました。

僕は夜中までゲームやSNSを  
しているから、朝早く起きられ  
なくて学校に行けないんだ。や  
めなくちゃと思っているんだ  
けど、それができないんだ。



中学校の部活(陸上部)には参  
加しているんだ。今はやり投げ  
を担当しているんだ。

学校の友達ができ、きのう一  
緒に夏祭りに行ったんだ。

自分が落ちついた気持ちになれる場所を  
見つけたのかな。

スタッフに自分のことをたくさん話す  
ようになったな。

卓球をしている時間とスタッフと話をしている時間は、Dさん自身が抱えているいろいろな不安を忘れさせてくれる大切な時間になっているのではないかと、スタッフ間で話し合いました。

中学3年生になってからは高校受験を意識するようになり、勉強する時間が増えました。そんなDさんでしたが、突如として「南野川」にまったく来なくなってしまいました。ちょうど保護者会の時期であり、家に連絡を入れると、ほとんど家の中ですごしているとのことでした。精神的に不安定な状態のようなので、本人への連絡は控えました。

半年ほどたったとき、突然Dさんが「南野川」に現れました。さらに身長が伸び、髪の毛をのばし、顔も引き締まり、ずいぶん印象が変わっていました。以前と同じように、スタッフと多目的室で卓球をしたあとで、Dさんは現在の自分の状況についていろいろと話しました。

もう夜中までゲームやSNSをや  
ることを一切やめました。

以前のようなことをしては  
ダメだと思うようになりました。

しばらく会わないう  
ちに、ずいぶんと大  
人っぽくなったな。

家にいる間に、自身のこ  
とについていろいろと考  
えたのだね。

身体も成長したけど、精神  
的にも大きく成長してたく  
ましくなったな。

相変わらず学校にはちゃんと行  
けていないけれど、朝早く起きて  
犬を散歩につれていっています。

進学する高校も決まりました。  
心配をおかけしてすみません。



「南野川」で毎年3月末に行っている「門出を祝う会」で、Dさんは感謝の気持ちを言葉にしてスタッフに伝えました。

ここに来ることで、僕はずいぶん  
助けられました。

僕の話がたくさん聞いてくれて  
ありがとうございました。



苦しい時に安らげる居場所があり、誰にも話せない自身の話に耳を傾けてくれる人が周りにいることが、精神的にどれだけ救いになるのか。そのことを改めて認識しました。

### ふりかえって

子ども同士や子どもとスタッフが一緒になって卓球や様々なゲームを行うことで、お互いの距離が縮まり会話が弾むようになります。このような時間の中で、子どもたちは安心し、コミュニケーションの力が少しずつ育っていきます。人との関わり合いをもっと持ちたいと思っている子どもは多くいます。Dさんの場合は、自ら誘って行う卓球を通じてスタッフを信頼するようになり、心を開いて自身に関する多くのことを話すようになりました。このことで、Dさんの気持ちが少しずつ上向きになっていったのでしょう。

## 事例2 畑の作業に積極的に取り組むEさん（中3）

しばらく「南野川」に来ていなかったEさんでしたが、中学2年生の夏ぐらいから頻繁に来るようになりました。Eさんは「3年生になったら僕は中学に戻ります」としきりに言っていました。3年生になった現在も学校へはあまり通えていません。以前のEさんは、あまり積極的に自分の意思を表す子どもではありませんでしたが、しばらくぶりに「南野川」に来るようになってから、少しずつ変化が見られるようになりました。勉強が一段落つくと、スタッフや何もしていない子どもたちを、ゲームによく誘います。また、スタッフに「何かやることありますか？」とたびたび聞きます。また、畑の作業に大変興味があるようで、積極的に参加します。

みんなでUNOやろうよ。先生も一緒にやりませんか。

梅の実採りをやらせてください。



畑の作業が好きなので、何か手伝うことあればいつでも言ってください。



畑に出ると、Eさんは嬉しそうな顔になり率先して作業に取り組めます。また、手伝いに来た年下の子どもに対しては、作業のやり方を丁寧に教えてくれる優しく頼れるお兄さんになります。

周囲の人との関わりを多く持ちたいのかな。



友達と遊べない寂しさを少し感じているのかな。



いろいろな事に貢献したいと思っているみたいだ。



このキュウリはもう採ってもいいころだと思うので切ります。

こちら辺のジャガイモは僕が掘るので、大きなシャベルを貸してください。



ジャガイモを掘る時は、なるべく茎から離れたところから掘っていった方がいいよ。

畑の作業をしているときは嬉しそうだね。

誰に対しても自然に接しているね。

野菜苗の植え付け、肥料入れ、水やり、育った野菜の収穫などの作業を手伝ったときは、スタッフはその度に E さんにねぎらいの言葉をかけるようにしています。その言葉を聞くと、E さんはとても嬉しそうに笑顔を見せて言葉を返します。



手伝いをしていることに対し、認めてくれるスタッフや感謝してくれるスタッフに囲まれて過ごすことで、E さんは自分に自信がつき、少しずつ精神的に成長していています。それにしただがって、E さんを慕って他の子どもから頼られたり、一緒に遊ぼうと声をかけられたりする姿がよく見られるようになりました。

#### ふりかえって

「南野川」の畑では、四季を通じて多くの種類の野菜をスタッフと子どもが一緒になって無農薬で栽培しています。危険な作業を子どもにやらせることは避けていますが、畑に出て自ら植え育てた野菜を収穫するといった、日常生活の中では滅多にできない貴重な体験をしています。子どもたちはこの体験を通して、野菜が育つことへの驚き、野菜を収穫する喜び、物事を成し遂げた達成感を感じているようです。E さんは、畑仕事などを通じてスタッフに頼りにされ感謝されることや、周りの子どもから信頼され慕われることにより、少しずつ自分に自信がついていって主体的な言動が増えていきました。

### 事例3 料理が趣味になった F さん（中3）

「南野川」に初めて来たとき、F さんは気力があまりない様子で、物事に対して積極的に取り組む子どもではありませんでした。もちろん料理にも全く興味がありませんでした。自宅でも、料理の手伝いはしていないとのことでした。しかし、「南野川」で調理実習に参加したことがきっかけとなって調理が好きになり、それと共に F さんの意識と言動に少しずつ変化が見られるようになりました。





今回はソーメンと天ぷらを作るんだね。楽しみだな～。

サツマイモの天ぷらは大好きです。

料理作りの楽しさに目覚めたね。

自分が興味を持てるものを見つけられたね。

調理実習を重ねるうちに、Fさんは料理の段取りや調理器具の使い方に慣れてきました。また、食材の切り方をスタッフに聞いてそれを実行したり、また、自分の役割を考えて友だちと作業を分担したりするようになりました。さらに、スタッフが指示をしなくても、自ら進んで片付けをするようになりました。



野菜を炒めるのは私がやります。

このまな板と包丁は、もう使わないので流しに持っていきますね。

上手になったね。

それじゃーまかせるね。

気をつけてね。

主体的に取り組む気持ちが芽生えてきた。

他の子どもたちと協調できるようになってきた。

面倒くさい作業も進んでやるようになった。

実習で作った料理は、昼食の時にスタッフルームに集まってみんなで食べますが、Fさんはいつも満面の笑顔で嬉しそうに食べています。作った料理について、周りの子どもとの会話がはずむようになりました。料理に興味なかったFさんは、調理実習でみんなと一緒に料理を作ることの楽しさや、作ったものをみんなで食べることの楽しさを感じたようです。また、次回の調理実習の日時を、自分の予定帳に書き入れるようになりました。こうして、料理がFさんの趣味の一つに加わりました。

これ、おいしいな～。

今度、これを自分の家でも作ってみようと思います。

自分で作った料理を食べることに感動しているみたいだ。



次回はフルーツゼリーを作るんですね。私の予定帳に書いておきます。



「料理」を自分の趣味の一つに加えたようだね。

## ふりかえって

1か月に一度、「南野川」ではスタッフルームを開放して調理実習を行なっています。子どもたちは、スタッフや他の子どもと協力して料理を作り、できた料理をみんなで一緒に食べます。畑で収穫した野菜を料理することもあります。調理実習を通して、基本的な調理の方法を覚えるだけでなく、子どもの興味が引き出され、主体性、達成感、協調性などが醸成されていきます。Fさんは、「南野川」にはそんなに頻繁に通ってくる子どもではありませんが、みんなと一緒にやって行う料理作りを通して自身の興味が引き出され、マイエプロン持参で休むことなく調理実習に参加するようになりました。Fさんは、調理実習に参加する中で、主体性やコミュニケーション能力が少しずつ育まれていきました。また、自身の生活の予定を組むようになりました。

## ■「こどもサポート南野川」の多様な学びと支援

「南野川」では、教科書や問題集を使ったマンツーマンでの学習支援以外にも、子どもとスタッフが一緒になって行う多目的室でのさまざまなゲームや卓球、農場での野菜の栽培と収穫、スタッフルームでの調理実習などを通じて、子どもたちは多様な学びの機会を得ています。これらの活動を経験する中で、子どもたちのコミュニケーション能力や自ら考え行動する力が少しずつ育まれていきます。



保護者の中には、いろいろな人と関わり合いを持って生活して欲しいという願いもあります。学校で先生や同級生との関わりを持つことがあまりできなくても、「南野川」では、多様な活動を通じてスタッフや多くの子どもと密に関わる機会を増やし、お互いにたくさん会話をするようにしています。気持ちが解放される多目的室での遊びや会話は、重要な機会の一つです。これからも「会話」を通して子どもたちに寄り添っていきたいと思います。

子どもの農業体験は、緊張、不安、怒りを低下させ気持ちを安定化させることが知られています。また、子どもの好奇心を喚起し、さらに、子どもの主体性や積極性も育まれていきます。このことから、畑の作業がある時は、なるべく来所している子ども全員に手伝いをお願いする声かけをしています。もちろん、その日の子どもの様子を見て無理をさせないようにしていますが、これからも畑仕事を通じて貴重な体験の場を提供していきたいと思います。

また、「南野川」では、スタッフと子どもが一緒になって料理をつくり、それをおいしく食べる活動を行っています。それを通じて、子どもの興味と活力を引き出し、主体性やコミュニケーション能力を育てています。「自分で料理を作り食べる」、これは食育の点からとても大切なことです。今後も、調理実習を通して子どもの成長と食育を支援していきたいと思います。

「南野川」で多くの時間を過ごした子どもたちは、3月の末に行っている「門出を祝う会」の挨拶の中で、「楽しく過ごすことができたこと」「いろいろな体験ができたこと」「体験を通してスタッフや他の子どもと気持ちが通じ合えたこと」について、言葉にしてみんなの前で伝えます。

「南野川」では、様々な活動を通じて、これからも多様な学びの機会と人との関わり場の場を子どもたちに用意し、子どもたちの成長を見守っていきたくと思っています。

### 3 安心して過ごせる場所「こどもサポート旭町」



「こどもサポート旭町」（以下「旭町」）は、学校に自分のいる場所が見つからない、自分のしたいことが見つからないなど、様々な思いを抱えている子どもたちが自宅以外に安心して過ごせる場所として開設されました。愛称は「STEP&GO(ステップ アンド ゴー)」で、開設当初に子どもたちみんなで決めました。

保護者と子どもと一緒に面談をした時に、施設にあるもの、

受け入れ方や体制、ここでの過ごし方等を説明し自分でもここでの時間を考えてくるように伝えます。スタッフは、あくまで子どもが「自分がやりたいこと」を第一にして支援をしています。来室した子どもの様子を見ながら、スタッフ間で意見を交換したり共有したりしながら、一人ひとりの子どもたちを見つめ、言葉をかけたり一緒に活動したりして、居場所の一つとなるようにしています。

#### 【用意している言葉】

- ・わからないことがあったら、何でも聞いてね
- ・困っていることはない？ ・手伝うことはないかな？
- ・何をやりたいかな？ ・無理しないでいいよ
- ・ほしい物があったら、教えてね
- ・2人で（3人で）いっしょにやってみようか
- ・〇〇ができて、びっくり。いつからこんなにできたの？
- ・ちょっと、休もうか  
(笑顔) (うなずき)

#### 事例 1 小・中・高と納得しながら成長していく G さん（高 1）

小 5 から来室していた G さんは、表面では明るく元気に見えますが、繊細な面があります。次第に気持ちや思いをスタッフの前でも表すようになってきました。自分で解決したいという思いを、強くもっています。悩んでいる中でふとつぶやく言葉や様子から保護者・学校・「旭町」がそれぞれに受けとめ、G さんの思いに寄り添い、一つ一つ G さんの気持ちを第一にして向き合ってきました。G さんはその都度、自分で決め、納得しながら進んでいきました。

学習にはほとんど興味を示していませんでしたが、小学校卒業が近づくと不安をつぶやいたので、スタッフは G さんに「勉強してみようか」と声をかけ、学習していました。

中学校では、部活を頑張るんだ。〈小 6〉



本当は勉強が気になっているんだよねえ。〈小 6〉

中学校の勉強、少しやってみる？

中 1 の夏休みを前に、「宿題と部活、両方をやるのは無理」と新たな悩みが生まれました。「部活を休むと、9月の新人戦に出られない。いまの自分では宿題と部活の両立は無理」と悩んでいました。

これは保護者の悩みでもあり、スクールカウンセラーも相談に乗りました。その結果「部活は必ず出る。宿題はできる範囲で」と納得し、落ち着き、G さんは動き出しました。



自分なりのペースで行動するまで待っています。

宿題と部活の両方をやるのは無理。部活を休むと、新人戦に出られない。どうしよう。〈中 1〉



自分にできることをやったらいいんじゃないかな。〈スクールカウンセラー〉

前期期末テスト中、テストを受けた後に来室してきました。「調子はどう？」と聞くと「悪くないけど、やっぱり勉強のことが心配だし、新人戦の選手になれるかどうかも気になる」と話し出しました。「テストは大変みたいだけど、一度決めたように、テストを受けているのは立派だよ」と励ましました。また卓球をして体を動かしたことで少しリフレッシュしたようで、帰宅しました。その後、新人戦の選手になったとの報告を受けました。



後期になり顧問の先生からかけられた言葉で悩むGさんでしたが、次に来室した時には、「自分で決めてなんとかやってみる」と話していました。そして部活のある日は登校し、ない日は「旭町」に来室というパターンから、中2、中3と次第に学校生活の比重が多くなり、通常の登校態勢となっていました。

自分なりのペースで行動するまで待ち、少しずつGさん任せにしていくと思っています。

「3時間目ぐらいに登校できないか」と言われたんだけど。〈中1〉



きっちり行こうとすると疲れるから、行けそうなきに行けばいいんじゃないのかな。

「もっと早く学校にきていればよかった」と言っていました。〈学年主任〉(中3)

なんとか自分で決めてやってみる。〈中1〉

受験日が近づくと、そわそわしていました。スタッフと「持ち物は…」「受験番号を書くことを忘れない」など繰り返して確認し、発表日までは落ち着きのない日々を過ごす一方、中学校を卒業する嬉しさと自分がここまで努力できた喜びを感じている様子でした。スタッフも同じ思いで、「合格した」と報告にきた時は、全員で喜びました。

高校の試験は大丈夫かなあ。発表日は〇日だ。〈中3〉



Gさんなら、大丈夫だよ。やる時はやるし、決めたことはきちんとやるから、安心しているよ。

高校では、どの部活に入ろうかな。楽しみだ。〈中3〉

高校の入学式当日に来室し、元気な様子を見せたが緊張のためかそわそわしていました。スタッフ皆で「今まで本当によく頑張ったね」と声をかけて送り出しました。その後、来室すると学習や部活動の話などをしたり、テスト前には、苦手な教科の勉強をスタッフと一緒にしたりして、高校生活を楽しく送っています。保護者の会に参加した保護者は「幸せです」という言葉を預かってきましたと、嬉しそうに報告してくれました。

「幸せです」と伝えてと言われました。



定期テストの社会科は、満点の自信があるよ。〈高1〉

今までほんとうによくがんばったね。入学おめでとう。

### ふりかえって

保護者・学校・「旭町」がそれぞれGさんの心のつばやきを拾い、向き合い、時に連携しながら、子ども自身が自分で納得し決めていくことを第一にしながら一つ一つ進んでいきました。それぞれが子どもの気持ち、状況を共有し、丁寧にかかわってきたことが大きな成果につながっていきました。学校、「旭町」と複数の人数がかかわっていく時、素早く、確実に共通理解をしていくことが重要だと考えています。

## 事例2 心を休め、元気をとりもどすHさん(小5)

Hさんは小3から「旭町」に通うようになりました。理由ははっきりしませんが、なんとなく登校できなくなってしまったということでした。

毎日開室直後に来室し、自分のペースで次から次へとやりたいことをやり大変活動的です。パソコンでタイピングをすると、素早い指さばきで的確に文字を打ちます。勝負事にも強く、花札、オセロ、トランプ(スピード)、マンカラ、人生ゲームは一位になることを望み、卓球でも点数にこだわり勝ちを求めて何度も続けました。一人で過ごすより、ほとんどの時間をスタッフと一緒に活動することを求めました。「勝ち」に執着し、ルールも少し「Hさん模様」があり、Hさんのペースで進んでいきました。「これぐらいで」「ほどほど」が少ないことから学校生活や友人関係において、一緒に時間を過ごすことに窮屈を感じる機会も多かったらと想像しました。

花札をやろうよ。  
(小3)



次は、トランプ(スピード)をやろう。すぐに、やろう！(小3)



Hさんは、マンカラも強いなあ。何度やっても、勝てないよ。

自分だけのペースで遊ぶのではなく、一人で過ごす時間を持つことや、相手のことや様子を見ながら行動することも身につけてほしいと考え、時計を見ながら行動したり、計画をたてたりするように促しました。

元来、人が言ったことや、言われたことはしっかり覚えていて、忘れることはなく行動していたので難しいことはありませんでした。本人も意識することで次第に遊びと遊びの間にはできる隙間時間を考えたり、行動したりするようになりました。学習をしたり、パソコンに向き合ったりして、スタッフにすぐ「〇〇しよう」と声をかけることは少なくなりました。

計画的に行動するにつれ、スタッフとの関わり方も柔らかくなっていきました。



〇時〇分になったよ。花札をやろう。  
(小3・4)



〇時になるまで待っててね。それまで自分のやりたいことをやっています。



〇時〇分まで、トランプができるんでしょう。先にやろうよ。(小3・4)

3年生の学年末になると来室しなくなり、4年生時も登録はしていましたが来室することはありませんでした。スタッフ間で、「どうしているんだろう」「学校に行っているのだろうか」など話をしていると、学年末(4年生)に突然来室してきました。久しぶりに会うHさんは、「学校に行っている」「疲れたので来た」と答えました。またしばらく来室を続け、これまで(3年生末頃)のように活動していました。新年度(5年生)は来室することはありませんでしたが、同様に登録はしていました。



5年生の夏休みが始まると来室してきました。学校に行っているけど、夏休みになると遊ぶ友達がなくなるので、「旭町」に来たと話しました。学校生活のことやサッカーを続けていることなどを話しながら、やりたいことを伝えてくる姿は、とても落ち着きのあるものでした。久しぶりに来室したHさんからは、相手のことを考える姿、譲り合う姿など成長の様子が見られました。



### ふりかえって

小学校3年生時に来室したHさんは、活気にあふれ、やりたいことをどんどんやり、自分の気持ちのまま行動していました。「旭町」は、自分のやりたいことができる場所です。やりたいことができ、心が落ち着き、満足感、安心感を得ることができます。しかし自分中心に進めていたことをスタッフと過ごしながらか、「ちょっと待つ」「もう少しだけにする」などと考えつつ気力も蓄えたようです。新学年になると登校し、疲れを感じると「旭町」に再び来室し、元気になる場所で活力を取り戻し、登校していきました。

来室する度に新しいHさんが見られました。学校生活の充実さや楽しかったこと、何度も頑張っていることを伝える姿はとても新鮮でした。今まで「旭町」で見せていた姿より成長した様子を見せ、スタッフには輝かしく感じられます。

「旭町」の利用の仕方を自分なりに考え、上手に活用、調整できる居場所があることが、成長につながっています。

### 事例3 悩みを複数のスタッフに相談しようとするIさん（小6）

Iさんは、小学校5年生時に「旭町」に来室してきました。

友人関係のことで頑張っていたが、どうしてもうまくいかないという理由が主でした。

同年齢なのに友達と合わないことがある、一緒にいたいけどむずかしい、と悩んでいるIさんは、絵を描いたり調理をしたりするのが大好きで、得意な子です。来室を重ねるにつれて話すことも多くなり、下級生にも、スタッフにもたくさん話すようになりました。

ある日、スタッフに尋ねてきました。

失敗したことある？



あるよ。〇〇の時、こんなことをしたんだよ。  
(スタッフ1)

……なことがあってね。あんなことをしなければよかったと思っているよ。  
(スタッフ2)

「旭町」の保護者の会に参加した保護者が、お子さんとの関わり方について講師に相談した際、「親の小さかった頃の話をするのもよい。過去の話をするのもよい。なぜ今の職業に就いたかを話すこともよい」などとアドバイスを受けました。帰宅後に家庭でいろいろな話をしたのではないのでしょうか。保護者の会の翌日に来室したIさんは、その日に自分からスタッフに「失敗したことある？」と尋ねてきました。一人ではなく複数のスタッフに尋ねました。そのIさんは、失敗したことを話すスタッフの言葉にしっかり耳を傾け、自分で感じた言葉を話していました。

#### ふりかえって

「旭町」には、複数のスタッフがいる。曜日によってメンバーは違います。Iさんは友人関係で悩みを持っていますが、どう解決したらいいのかまだわかりません。大人はどうだろうか、失敗したことがあるのだろうか。どんな失敗をしたのだろうか。親と話をしたと推測されます。「旭町」のスタッフはどうだろうか。大人に聞き、その話の中から自分と同じ思いだったり、違ったりしていることを感じたりしながら、自分の悩みの解決のヒントにつながったらいいと考えたのではないのでしょうか。

「旭町」では複数のスタッフが一人の子に関わることができます。そして「あなたのままでいい」「自分に納得できるものを見つけてほしい」と思い、応援しています。複数の人が関わることができる体制の下で、子どもたちが希望につながるヒントを見つけられたらと願っています。

## ■「こどもサポート旭町」の多様な学びと支援

「旭町」を訪れる子どもたちの様子は、一人ひとり違います。初回面談時に保護者と一緒に見せる姿と、登録後に来室して過ごす様子が違うこともあります。しかし、家から出て「旭町」に通ってくることから、「今の生活を何か変えたい」「家にいるより外に出てみたい」などの思いをもっていることだろうということは想像できます。

その子どもたちの「旭町」での様子は、

- ・来室しても、挨拶だけして帰宅する
- ・ほぼ同じ時刻に来室し、退室する
- ・ずっとスマホだけを見て、ひとりですごしている
- ・座る場所、過ごし方がほぼ決まっている
- ・スタッフに悩みやうれしい話等を聞いてほしいと語りかけてくる
- ・やることが決まっていて、すぐに始める

といろいろです。「旭町」での過ごし方がそれぞれに違いますので、スタッフは今日の過ごし方を尋ねたり確認したりしながら、関わりを考えています。やりたいことを特に決めていない時は、いくつかの候補を挙げ、無理に強いることがないようにして、子ども自身が納得して進めていくようにします。

スタッフは様々な事情をもってやってくる子どもたちの声を聞き、受けとめ、「旭町」が居場所の一つとなるように、下記のような思いをもって関わっています。私たちは「旭町」が、安心して過ごせる場所で、子どもたち自身が考えて決め、今より一歩でも先に進もうとする思いが高まるよう、支援していきたいと思えます。

〈スタッフの思い〉

① 子どもたちの居場所の一つとなるように

- ・安心する
- ・ゆっくりできる
- ・ゆったりできる
- ・安全にすごせる

② 子どもが自分らしさを出せるように

- ・心に寄りそう（子どもの心にそって）
- ・あいさつを（一人ではないよ、同じ場にいるよ。声を出す）
- ・声かけを（負担にならないよう）
- ・見守りを（かかわる 一緒に そっと 一人に）
- ・認めよう（しっかりやっていたね、がんばっていたね、集中していたね）
- ・共感を（わかるよ、そうだよ、そうなんだ、いいんじゃない）
- ・経験から、経験を伝える

③ 少しでも前に進んでいく「STEP & GO!」となるように

- ・ここでは、のんびりしても(何もなくて)いいんだ
- ・また来たいなあ
- ・ちょっと、ゆっくりできたかな
- ・また(明日も)来てみようかな
- ・少しだけど、勉強がわかったよ 続けてみようかな
- ・花札って、おもしろかったな
- ・数人でやるゲームが、一緒にできたよ
- ・今度は、弁当を持ってこようかな
- ・やりたいことが、出てきたよ
- ・元気(やる気)が出てきたようだ
- ・〇月になったら…
- ・進級したら…
- ・進学して…

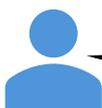
**STEP & GO!**

## 4 多様な学びをつくるスタッフの取り組み

### (1) スタッフが日常的に取り組んでいるミニ事例

3つの「こどもサポート」のスタッフに「子どもの声を聞き、子どもの学びに合わせて、学び方や学習内容を変えていった例がありましたら教えてください（自由記述）」という問いを投げかけました。それに応じて集まったスタッフの事例の中からいくつか紹介します。

#### 事例①



「子どもの声を聞き…」とありますが、子どもの声を聞けたらどんなにいいだろうと思っていました。

「こんにちは」「さようなら」もなく、もちろん「ありがとう」も一度もなく、終始無言。不機嫌そうな表情や態度に胃が痛くなることもありました。私は、英語担当でした。数学担当の先生と情報交換していたのでなんとかやってこられました。もし、自分だけだったら、自分を責めるしかなかったです。

いろいろ聞かれることは嫌そうだったので、よくサポートセンターに来たことを褒めていました。理解力があり、書くことはスムーズに取り組んでいたため、プリントを準備して、宿題としても出していました。毎回よくやってきたので、力をつけてきました。すごいことだと褒めました。子どもの声は、少し聞けたかもしれません。

#### 事例②



フラットな気持ちで対話を重ねたら、見えてきたことがありました。

サポートセンターに毎週来ることができず、なかなか学習が進みませんでした。ある日、学習中の雑談の中で家庭学習の習慣があることがわかりました。

そこで、サポートセンターでは、テキストを使った学習を進め、多めに用意したプリントの中から学習し、残った問題を家庭学習に使えるように渡しました。少し内容が多かかなと思いながら、プリントを渡してみると、しっかり家で学習してきました。

休みがちでさほど学習に熱心に取り組む子ではないという印象でしたが、抵抗なく家庭学習している子どもだったのが意外でした。どの子へも、先入観にとらわれず、対話を重ね、フラットに向き合うことの大切さを実感しました。

#### 事例③



学習に入る前に、大好きな電車のお話をしよう！！

サポートセンターでは、大好きな電車や路線図などに興味を持ち、スタンプラリーに取り組んだりしたことをよく話していました。そこで、学習前に好きな電車についての情報を話したり、学校へ行ったときのことを話したりして、思いを十分に聞いた後に、少しずつ学習に取り組むようにしました。苦手な作文などはやったこと、思ったことを箇条書きにして、それをもとに文章にする方法をとるなどの工夫をしました。

このように好きな電車などについて話すことを通して、少しずつ自分から学習に取り組むようになり、大きく成長したと思います。

#### 事例④



ぬいぐるみが話し相手で、いいのかしら?と、思っていましたか…

「どうしてぬいぐるみをたくさん持ってきたの?」と、聞くと、「自分一人で活動しなければならない時、寂しいから遊べるように持ってきているの」と答えました。大人になっても「推しぬい」があると、ちょうど新聞に載っていたので、この子どもの言葉に寄り添う気持ちになれました。

ぬいぐるみではなく、友だちとコミュニケーションを取りながら活動する時がいずれ訪れると信じて、これからも見守っていきたいと思います。

#### 事例⑤



子どもにあった最初の日、どんな英語の学習をしたいのか、聞いてみました。すると…

「英語で、こんな時、どう表現したらよいかという学習をしたい」という希望がありました。例えば、「お願いしたいとき」「依頼を断るとき」「うれしい気持ちのとき」「感謝を伝えたいとき」「朝起きてから夜寝るときまでのつぶやきの表現」などです。

そこで、日常の様々な状況の中、自分の気持ちや自分のもっている情報をどう伝えたらよいかという学習を中心に進めていきました。学校では、どうしても40人の規模で学習を進めるしかありません。サポートセンターでは、学習する時数は限られているものの、子どもと個別に時間を共有し、受験に向けた学習ばかりでなく、実際の言葉の使い方から英語にアプローチするなど、子どもの希望に合わせた学習を行うことができます。

#### 事例⑥



中学校2年生の子どもでしたが、「小学校の算数から始めたい」という本人の希望で小学校の内容から学習を開始しました。

本人と話し合いながら学習の理解度を確かめつつ、小学校の学習内容を取捨選択しながら学習を進めました。現在、中3になりましたが、中学校の学習内容の数量編だけを一つ一つ丁寧に学習している状況です。

多くの子どもたちは、数学に対する苦手意識が強く、「やってもわからない」「何から学習していけばいいのかわからない」とうケースが多いのですが、本人との対話を重ね、学習状況を把握したり、子どもの思いを理解したりしながら進めると、少しずつ自信をもって取り組むことができるようです。

### 事例⑦



「英語を教科書で勉強するのは嫌だ!!」と言う。どうしたらやってくれるのかしら…

「教科書で勉強するのは嫌だ」と言います。そこで「最近何かやったことはあるの?」と聞きますと、「富士山に行った」と言いました。そこで「誰と行ったの?」「どうやって行ったの?」と聞き、答えたことを簡単な英語にしてみました。そうすると、「今日、英語ありますか?」と聞いてくるようになりました。

中学生になってから全く英語に触れていない子どもたちもいます。日常の出来事を英語にして表したり、日本の昔話を英語にして書いたりすると、少しずつ英語に対する抵抗がなくなっていくように思いました。

### 事例⑧



理科の学習を希望して始めましたが、その他のことで何をしたいか聞いたところ、「モノ作りをしたい」とのことでした。

教材のおもちゃづくりを3つほど行いました。その教材から電磁石の強さ、コンデンサーの容量や電流・電圧を測定するなど理科の教科書の内容についても学習しました。

また、東京学芸大こども未来研究所で開発していた「TECH 未来」という教材を買っていただけなので、それを使い、おもちゃの車のギアを変えるなど4種類の車を自力で作りました。そこで、速さの求め方を教え、一番速く走る車がどれかを調べました。さらに、同じモーターと電池を使い、おもりを巻き上げる力についても調べました。そして、モーターに流れる電流・電圧を測り、その発展としてオームの法則や抵抗の大きさについても学習しました。

モノづくりを通して、自然と理科学的な内容、特に電気について結びつけることができ、良かったと思っています。今後、どのようにモノづくりから理科学的内容に発展させることができるか悩んでいます。

### 事例⑨



自分から話すことはなく、聞かれると単語で答えていました。何をしたいのかなあと、心配でした。

ここでは、「やりたいこと」「やりたくないこと」「好きなこと」「きれいなこと」など思ったことを言っている場所だということ、機会あるごとに伝えていきました。卓球が好きで、それが来室する目的になっているようなので、「卓球をやりたくなったら言葉をかけてください」と話すと、少しずつ自分から声をかけてくるようになりました。今は、子どものリズムを大切に、スタッフは本人の負担にならないように気をつけて見守っています。

## (2) 継続して子どもの声を聞く

### ① 卒業生の言葉

「こどもサポート」は、小・中学生が多く利用していますので、中学や高校を卒業したタイミングで、「こどもサポート」を卒業という意識をもつ子どもが多いです。でも、その後もたまたま遊びに来たり、顔見知りのスタッフとおしゃべりしに来たり、今通っている子どもたちの先輩として会いに来たりすることがあります。

そのような「こどもサポート」に通っていた頃の自分を少し客観的に見ている「こどもサポートの卒業生」の声も、私たちスタッフは、こどもの思いや願いを知る手がかりとして受け取っています。

Jさん 宮ノ下（年齢 18 歳）

小学校の低学年から高校に入学するまで「宮ノ下」の学習に通いました。

「宮ノ下」の先生は僕の小さい頃から知っているのですが、僕より僕のことをわかっていると思うと、今もちょっと緊張します。いろいろな子どもを見ているから、どんな子どもにも対応しているところがすごいと思います。表面的なことにはだまされず、その奥まで見透かされる気がしました。だから緊張するし、安心もできます。

僕は自分を甘やかしてしまうけど、先生たちは僕を甘やかさなかった。だから厳しいと思っていました。でも、自分は甘いところがあるから厳しくしてもらった方がいいと思っていました。

高校に入ってから、「宮ノ下」に行って力がついたことがわかりました。いろいろなことができるようになっていました。授業を聞いていて「よくわかる」という実感がありました。「宮ノ下」で勉強のしかたがわかったからだと思います。だから高校の成績は 4 や 5 が増えていきました。僕は、学校に行ってから夕方宮ノ下に通っていました。そういう生活に慣れていたので、忙しい高校生活や、その後のバイトも苦も無くできました。

サポートセンターがなかったら今の自分はなかったと思います。

今は就活中ですが、履歴書を悩み悩み書いて、3 日間、眠れませんでした。母にダメ出しされ、学校の先生にダメ出しされ、3 回以上書き直した後で、「宮ノ下」で中学時代に教えてもらった先生に写メを送って相談しました。今は、面接の練習やアドバイスをもらいながら就職準備をしています。

Kさん 宮ノ下（年齢 15 歳）

高校受験を前に、苦手な数学を学習したくて「宮ノ下」に来ました。

分からないところを丁寧に説明して教えてもらったので、数学が楽しくなってきました。試験では数学が最高得点で、自分でもびっくりしました。サポートセンターでゆっくり教えてもらったので、合格できたと感謝しています。

## ②「あなたの声を聞かせてね」ポストの設置

今年度、常時、継続して「子どもの声」を聞いていこうと、「あなたの声を聞かせてね」ポストを、3つのこどもサポートに設置してみました。



技術家庭科の学習をしたいという子どもが時間をかけてポストづくりに挑戦してくれました。カードは、まだ何通かしか来ていませんが、一部掲載をすることに了解を得た内容を紹介します。



**あなたの声を聞かせてね**

○「ちょっと、聞いてほしい」と思うことを何でも聞かせてね。  
「よかったこと」や「うれしかったこと」、  
「こまっていること」、「いいたいこと」など

★書いたことのみみつは守られます。



★下の表に書いて「聞かせてね」ポストに入れるか、上のQRコードを読みとって、記入して送ってください。

|  |
|--|
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |

※よかったら、こどもサポートの場所をおしえてください。  
( 宮下 旭町 南野川 )

※へんじがほしい人は、名前を書いてください。

普段工作もしていなかったのが難しかったのですが、楽しく作ることができました。このポストを通して、たくさんの方が気軽に自分の気持ちを書いて出してくれたらいいと思います。

バスの使い方がわかったよ。こどもサポートに来て、外に出ることが増えました。



ぼくは、サポートセンターで、聞きたいことは聞きまくっているのですが、言いたいことは、とくにないです。



今日は、初めてのバイトの面接です。遊ぶためにも、将来のためにも、お金をもらう難しさを知るためにもがんばりたいです。  
でも、昨日食べたエビチリのタレが髪の毛について最悪。がんばるぞ～！



## Ⅳ 令和6・7年度の研究を振り返って

### 1 研究の成果と今後の課題

この報告書の冒頭で、「不登校」のとらえ方の移り変わりについて述べさせていただきました。令和6・7年度の子どもや保護者のアンケートを見ていると、子どもたちが「学校に行けない」と悩んでいたことから、「学校に行かない」あるいは「学校は行かなくてもいい」という自分の意思を表してきたように感じています。

この2年間に、「サポートセンターに通う子どもの声」を聞いたアンケートやスタッフからの聞き取り調査の中では、子どもたちは「勉強がわかるようになりたい」という切実な願いを持っていることが感じられます。今年度の調査結果の中でも、子どもたちの「行きたいと思える学びの場」は、「自分の好きなことや興味のあることが学べる」「勉強を自分のペースでゆっくり取り組める」という回答が一番多くなっています。

また、学習や面談などで様々な子どもの声を聞く中で、特に印象に残った言葉は、宮ノ下における面接相談の時に子どもが発した言葉です。それは、ここでどんなことをやりたいかと聞いた時に、「私は、国語と算数の勉強がしたいです。それは、自分が生きていくために必要な力だと思うからです」との答えです。その時、その子が自分に必要なものを考え、買い物をして代金を支払い、お釣りをもらう場面が思い浮かびました。この子が必要としている「生きる力」が見えたような気がしました。

今年度のアンケート調査によると、保護者の皆さんは、子どもにこれからつけてほしい力を「勉強」よりも「いろいろな人との交流」をあげています。これは、保護者の皆さんが「人とかかわる力」を社会で自立して生きていくために必要な力と感じているからでしょう。

一般的にオンラインで学習する方向を推奨する風潮もありますが、今回のアンケートでは、子どもや保護者の両者がオンラインで学ぶことを重視していません。人と関わり、自分のペースで自分の必要な力を高めることを望んでいるのです。

文部科学省の不登校対策では、「学校復帰」を唯一の目標とはしていません。将来精神的・経済的に自立し、社会の中で豊かな人生を送れるようになることを目指しています。子どもたちが「勉強がわかるようになりたい」と考え、保護者の皆さんが「人とかかわる力をつけてほしい」と考えるのは、それぞれが「社会的自立」のために必要なことを感じ取っているからなのでしょう。

この2年間の研究で、子どもたちや保護者の皆さんがサポートセンターに通ってくる意味がはっきり見えてきました。それは、それぞれの子どもたちが自立に向けた多様な支援を求めているということです。3つのこどもサポートの実践事例を見ても、それがはっきり表れています。3つの異なる形態で子どもたちへの多様な支援の場を用意していることが、いわゆる「学びの多様化学校」の役割を果たし、「子どもの声」に応えることになっているのだと思われます。

しかしながら、「子どもの声」を聞くことには大きな課題があることも私たちは自覚しています。今回のアンケート調査の中でも、保護者の方が自分のお子さんが「思ったことが言えている」と考えている割合は48.8%、「思ったことが言えている」と答えた子どもは32.5%です。保護者と子どもの間でもこれだけの差異があるのですが、親子ともに「言えてる」と思っている割合は、半分にも満たないのです。両者の数値からも「子どもの声を聞く」ことの難しさがわかると思います。

また、スタッフのミニ事例①の中で紹介したように、「こんにちは」「さようなら」という言葉すら発してもらえず、何とか担当する子どもたちとコミュニケーションをとろうと苦勞し、様々な工夫を凝らすスタッフもたくさんいます。日常的に気軽に子どもたちが自分の思いを書いてくれたらと、「あなたの声を聞かせてね」ポストも設置してみました。そこから、子どもたちが本当の思いを聞き取ることができるかどうか、これからの課題です。

もう一つの大きな課題は、学校や他のフリースペース等との連携です。それは、サポートセンターの中で、形態の異なる「こどもサポート」を準備し、子どもの多様な支援を行おうとしても、子どもの声に応えるには限界があると感じているからです。現在、学校に通いながらサポートセンターに通う子どもや「フリースペースえん」など他の学ぶ施設に通いながらこどもサポートに通う子どもが増えています。これらの「子どもが学ぶ施設」同士の連携が、今求められているように感じられます。サポートセンターでは、学校や他のフリースペースと連携を図らなければと考え、互いの情報交換などを始めています。また、「親の会ネットワーク」などに参加し、保護者との連携も図るように取り組み始めています。これらの取り組みは、子どもたちへの多様で多層な支援を図るために、今後一層重要になってくると思われる。

一方で、次期学習指導要領の改訂の方向がどの新聞においても報じられるようになりました。その内容は今までの学習指導要領にはなかった論調です。少し、ご紹介します。「中央教育審議会特別部会の論点整理で見えてきた次期学習指導要領の方向性。多様な子どもを包摂することを中核に据えて、通級指導教室などで受ける学びに困難がある子や、不登校の子、特定分野に特異な才能のある子、日本語指導が必要な子の、特例的な教育課程の新設や充実が盛り込まれている」(2025年9月28日朝日新聞)。これらの内容は、学校のカリキュラムを子どもに寄り添い、より柔軟に考えていこうとする方向です。しかしながら、このような考え方が現在の学校や地域社会ですぐさま定着するようには思えません。最も大きな課題は、社会全体で一人ひとりの子どもの個性に寄り添った支援をしていこうという意識の醸成だと思います。

サポートセンターの令和6・7年度の研究では、日々子どもたちの発する言葉や何気ない仕草から「子どもの声」を探り、多様な支援のあり方を探ってきました。学校や他のフリースペースとの連携、様々な「親の会」との連携は始まったばかりですが、今後の課題として取り組んでいきたいと考えています。



## 2 研究の経過・研究協議会の委員等

### (1) 令和7年度 研究の経過

#### ◆研究部会◆

| 月 日    | 場 所        | 内 容                    |
|--------|------------|------------------------|
| 4月 9日  | こどもサポート宮ノ下 | 前年度の振り返り・研究テーマについて     |
| 5月 7日  | こどもサポート宮ノ下 | 研究テーマ・研究方法・研究日程検討      |
| 6月 4日  | こどもサポート宮ノ下 | 研究テーマ・実践事例・アンケートの内容検討  |
| 7月 2日  | こどもサポート宮ノ下 | 研究テーマ・実践事例・アンケートの内容検討  |
| 8月 6日  | こどもサポート宮ノ下 | 各部会ごとの内容検討について         |
| 9月 6日  | こどもサポート宮ノ下 | 研究テーマ・アンケートの内容確認       |
| 10月 1日 | こどもサポート宮ノ下 | アンケート集計状況確認・実践事例内容検討   |
| 11月 5日 | こどもサポート宮ノ下 | 各アンケート集計結果・実践事例の検討     |
| 12月 3日 | こどもサポート宮ノ下 | アンケートの表記の仕方検討・報告書の内容検討 |
| 1月 7日  | こどもサポート宮ノ下 | 報告書原稿の最終確認・係分担の最終確認    |
| 1月21日  | こどもサポート宮ノ下 | 報告内容検討・2月10日のリハーサルに向けて |
| 3月 4日  | こどもサポート宮ノ下 | 研究の振り返り・次年度の研究について（予定） |

#### ◆研究協議会◆

| 月 日    | 場 所        | 内 容               |
|--------|------------|-------------------|
| 6月20日  | 川崎市教育会館    | 研究テーマ・研究構想の検討     |
| 8月22日  | 川崎市教育会館    | 研究テーマ・アンケート内容等の検討 |
| 10月17日 | 川崎市教育会館    | アンケート内容・実践事例の検討   |
| 12月19日 | 川崎市教育会館    | 研究報告書内容・研究報告会の検討  |
| 1月30日  | 川崎市教育会館    | 研究報告内容・研究報告会の検討   |
| 2月14日  | 川崎市生涯学習プラザ | 研究報告会             |

### (2) 研究協議会の委員

◎委員長 岡田 守弘 先生（横浜国立大学名誉教授）

○研究主任 山田 雅太（こどもサポート宮ノ下）

田中真喜男（サポートセンター理事長）

保崎 万里（サポートセンター副理事長）

海老沢 衛（サポートセンター事務局長）

東條 光一（サポートセンター担当理事）

齋藤 正（こどもサポート宮ノ下）

井上なおみ（こどもサポート宮ノ下）

渡邊 壽枝（こどもサポート宮ノ下）

岸 秀子（こどもサポート宮ノ下）

柏崎 京子（こどもサポート宮ノ下）

松野 剛一（こどもサポート宮ノ下）

西尾 俊幸（こどもサポート南野川）

中村 清治（こどもサポート旭町）